

---

# 読んで楽しむダークソウル

ヨイヤサ・リングマスター

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

読んで楽しむダークソウル

### 【Nコード】

N9428X

### 【作者名】

ヨイヤサ・リングマスター

### 【あらすじ】

この小説はオリ主が全エリア、全デーモンを倒す物語ではありません。

作者のフロム脳を暴走させて原作キャラで気に入った人たちの過去、現在、未来をそれっぽく書いていく短編集のようなものです。尚、作者は10月26日現在で、ストーリーを二周しかプレイしていないので、プレイ不足による原作との矛盾や誤認などもあるかもしれません。

その場合、投稿した話についても大幅な修正が入る可能性もあります。

まあ、基本的にギャグなので「こういうのもアリだろう」みたいな話にしていけますが。

D A R K   S O U L S   は最高に面白いのです!!

ヨイヤサ作品?7   テーマは『フロム愛によるシュールな作品』

## 第1話：病み村の犬（前書き）

ヨイヤサ・リングマスターと申します。

この作品は私のフロム愛によって書かれておりますので変わった話ばかりになります。

なんだか短編集としての作品ならいつ完結してもいいかな？と  
考えたら筆の進みが異様に早かったのでw

これからこの作品は気分で投稿します。

## 第1話：病み村の犬

第一話：誰が予想したか！？ 『病み村』のエレベーター動力源の謎！！

あるところに一匹の犬がいた。

彼の名前はサカズキ。最初はただの犬だった。まあ、「ただの」と言っても、火を吹く真つ赤な色をしていることを除けばなのだが。

一族の中ではそれなりに力のある存在だったが、別段それを振りかざそうともしなかった。

彼には夢があつたのだ。それは自身の生まれ育った『病み村』を活性化させて、観光地として人気を集めたいという夢だった。

その夢を、風の噂に聞いたのだらう『病み村』の支配者『混沌の魔女』クラীগがサカズキの元を訪れ、こう言った。

「お前の夢は実にすばらしいものじゃ。

私の妹のためにも、この『病み村』は人間性をたくさん持った人間を集めなければならない。

協力してくれぬか？」

「ははっ！ まさかクラীগ様が自分のごとき矮小な存在を目にかけていただけるとは光栄の極み。

貴方様になら私は全てを尽くしましょう」

そうして『混沌の従者』となった一匹の犬は、観光客から常々不便だとの声をもらっていた『飛竜の谷』側にある『病み村』の入口と蜘蛛姫姉妹の住む下層とを繋ぐ道にエレベーターを設置した。

そのエレベーターの動力源となったサカズキは、火を吹くこともなく、ただただ歩き続けて『病み村』の上と下を繋げるだけの仕事をするようになった。

仲間たちは『病み村』の支配者、『混沌の魔女』クラーグから直々に賜った役職に敬意を示し、『混沌の従者』となったサカズキは『病み村』の火吹き犬一族のボスとなったのである。

「自分には忠誠を誓う絶対の主がいる。

すでに火を吹くことも、やってくる人間を襲う必要もない」

火を吹く必要もなくなったサカズキだが、皆の尊敬を一身に集めるその崇高な職務は他の『病み村』のモンスター、大ヒルやデブからも『病み村』勢力の一角を担う存在として扱うのだった。

絶対の忠誠を誓える素晴らしき主に巡り合った一匹の犬、サカズキ。

その身体に『混沌の魔女』クラーグから古き時代の言葉を身体に直接刻み込まれた伝説の火吹き犬。

彼はいつまでも『病み村』のエレベーターを動かし続けるのであった。

……そんな日々が永遠に続くと思っていた。

しかしサカズキはある日感じたのだ。

常に心を感じていた自身が仕える主の気が消えたことを……

「馬鹿な！？ 主の気が消えた！？

まさか……いや、死んだなどありえん！

我が主が人間などに負けるはずなどない！

我が主クラーグ様が妹様を残して死ぬわけなどない！！」

より気配を探ろうと毎日のように何年も続けてきた『病み村』の上と下をつなげる滑車を回すという仕事を止めてまで感覚を鋭くして探った。

だが何度探ってもサカズキの敬愛する主、クラーグの気が感じられない。

「妹様が危ない！

主を倒した者に御側付きのエンジニア殿だけで対処できるとは思えん！」

サカズキは一声鳴き、一族を召集し、情報を得ることにした。

「サカズキ様、クラーグ様は確かに人間に倒されてしまったようです。」

しかしながら妹様はエンジー様の咄嗟の機転により隠し部屋に逃げ込んだようで難を逃れているようです」

「そうか……。」

皆の者、我は我が主、クラーグ様を殺した者を許してはおけぬ。故にこの『病み村』の上と下とを繋ぐ役職をお前たちに任す」

そう言つてサカズキは旅支度を整える。

と言つても特に荷物があるわけでもなし、世話になった『病み村』の他の種族の仲間たちに別れを告げた程度だが。

「では行つてくる。」

妹様のことはエンジー殿が見てくれるだろうが、妹様はそのお身体故に人間性を常に必要としている。

お前たちには私の仕事だけでなく、やってくる人間から人間性を奪う仕事も並行して行つように」

「……はっ！ 我ら火吹き犬一族はサカズキ様と妹姫様のために全身全霊をもつて職務に当たります！」

側近たちに見送られ村を後にするサカズキ。

彼がクラーグを殺した人間に復讐するのはいつになるのかは分



から  
ない  
……

## 第1話：病み村の犬（後書き）

火吹き犬のサカズキ君の名前の由来は、まあ、あれですねw

『病み村』のエレベーターをコロコロ回す犬がとても可愛かったものでw

何で第一話にこんなキャラ出すんだよ！？ という人がいることを期待しての第一話ですが、一応他のキャラも書く予定です。

蜘蛛姫姉妹は勿論ですが、『病み村』勢だとクラナさんや大沼のラレンティウスさんなんかも書きたいですね。

「爛れ続ける者」もクラグさん達の弟みたいですけど、指輪の説明を読むと、なんだかうっかり屋さんみたいで可愛らしいですし。

更新頻度は来月一日から連載予定の『うたわれるもの』の二次小説に影響が出ない程度にするつもりです。

ではこの作品を読んでくださった人たちにこの言葉を贈ります。  
「アンバサー！」

## 第2話：ウーラシールの姫君と人喰いの妹（前書き）

タイトル通りの二人のお話。

この話も私のフロム脳によって書かれた作品ですので「確かにこういう話があるかもな」と思っていただければ幸いです。

本当に原作の設定などは限りなく広い解釈とフロム脳を基盤として書かれた物語ですので妙な雰囲気ですが。

この話が原作の真実の設定である可能性が零ではないというだけの物語です。

そんな感じの古代王国ウーラシールの物語。

## 第2話：ウーラシールの姫君と人喰いの妹

古代王国ウーラシール。そこは特に何があると言う訳ではないが争いのない、静かな国であった。

今回のお話はその国にいた、ある姉妹の物語である。

木々が生い茂る緑豊かな場所。そこに一人の少女がいた。

いや、もう一人。女性としての大事な部分を、わずかばかりの布で隠した、ずた袋を被った少女がやってきた。

「姉さん！」

「あら、ミルドレット。もう学校は終わったのですか？」

「今日は半ドンだぜ！」

それより姉さんは毎日ここに来るけど飽きねえのか？」

「ふふふ、私たちの国ウーラシールでは毎日を平和にゆっくり過

すことが法律で決まっているじゃない」

「いや、別に法律ってわけじゃないだろ」

二人は姉妹。姉は名を>宵闇<と言い、妹はミルドレットと言う。

この魔術大国ウーラシールの王女である。

「それよりも聞いてくれよ姉さん！  
今日は学校にスペシャルゲストとして、あの！>審判者<様が来てくださったんだよ！！」

「あらあらまあまあ      あの>審判者<様が来てくださったのですか。」

それは素晴らしいことですね」

>審判者<とは、このウーラシールの国よりも遠く離れた場所にある『嵐の祭祀場』と呼ばれる邪教崇拜の地で罪人を料理して骨までしゃぶり尽くすよと評判のデーモンである。

その容姿はデーモンだけあって常人の倍以上はある巨体と大きく裂けた口。それに頭に乘せたオウムである。

そんな彼だが、学ぶ意志のある者を拒まないウーラシールにある調理師学校『ミルド神殿』は門戸を広く開いて誰でも受け入れるよ

うにしているために、人外ながら首席で卒業をしたという過去もある。

そんな彼に懂れて『ミルド神殿』に入学する者も少なくない。

また『ミルド神殿』は調理師学校であると同時に、名前の通り神殿としての機能も持っている。

そのためにミルド神殿保有の騎士団は、高い信仰心を持つ『神殿騎士』通称アンバサ戦士、またの名を機動戦士アンバサと呼ばれる人たちで構成されており、その手には聖職者には不釣り合いながらもしつかりと神の加護を受けた巨大な剣や戦斧を持ち、背中には過去最優秀な成績で卒業した>審判者<の描かれた盾を背負う姿こそ基本装備としている。

敵には多大な徒労感を、味方には若干のウザさと安心感を与える選りすぐりのエリート of 装備にその姿が描かれていることからして彼の人気の高さは窺い知れよう。

「あなたも『ミルド神殿』の首席ですからね。

>審判者<様からは学ぶことも多かったでしょう」

「はい！ 今日人間を材料とした料理を教わってきました！  
いやはやさすがは>審判者<様。その独創的な調理方法は、まさに『超理』と呼ぶべき凄さ！

学校を卒業してからも研鑽を続けていたようで、他の料理の調理方法もどれも斬新かつ理を超えた素晴らしいものでした！！」

クスクスとおかしそうに笑う>宵闇く。

姉である>宵闇くは第一王女ということで、この国の次の女王になるか、婿をとることになっているのが決まっているのだが、妹ミルドレットは姉がしっかりしている分、自身の夢、すなわち料理人を目指しているのだ。

まあ、姉がしっかりしているかについては疑問が残るが。

「では姉上、今日は私の手料理を披露させてもらいましょう。  
暗くなる前に帰りますよ」

「いいじゃないですか、暗くなっても。  
私には『照らす光』という照明魔術が使えるのだから暗闇なんて怖くないわよ」

と言うか、この国ウーラシルには光を出したりという日常生活に使う程度の魔術しか存在しない。

根っからの平和的思考の国民性なのだ。

「いえ、ここ最近モンスターの活動が活発になってきていますし、  
姉上一人ではあつと言う間に殺されてしまうでしょうからね」

「死んだら死んだでその時よミルドレット。  
人間つてのは生まれてから死ぬまでの間、終始『生きている』と  
いう実感を持てる人生を送ればそれは幸せなことよ。クスッ  
だからまあ……、死ぬべき時に死ぬのならそれでもいいわ」

「まったく姉上は……」

> 宵闇<の言うことももつともだが、それは自分のことを大切に  
想ってくれる周りの人の気持ちを蔑ろにしていると取られかねない  
発言でもある。

まあ、姉である> 宵闇<のことをよく知るミルドレットは、姉の  
心理をよく理解しているので、そんな風には考えていないのだが。  
すなわち> 宵闇<は何も考えていないのだ！

「（何も考えていないのに、それっぽい事を言って話を煙に巻くの  
が上手い人だ）」

だがミルドレットは、そんな姉が大好きなので何も言わなかった。  
そのまま、いつものやり取りを済ませたを終え、では城に帰ろう  
としたところで異変に気づいた。

「！？ 姉上！ 町の方から火の手が上がっています！」



「あらあらまああ……  
どうしましょうか？」

王城へと帰ろうとしていた矢先に街から上がる煙。

「姉上はこのまま城に戻ってください！  
私は『ミルド神殿』の神殿調理騎士の一人として敵を完膚なきま  
でに叩きのめして見せます！！！！」

このウーラシールに存在する調理師学校『ミルド神殿』の生徒と  
卒業生によって構成されるミルド騎士団は基本的に専守防衛だ。

そもそも大半の騎士が用いる『ミルドハンマー』は対人戦を意識  
しているために人間以上の巨大なモンスターやデーモン相手には使  
い勝手が悪い。

それに『ミルドハンマー』を使う人間は素人が多く、相手に避け  
られたり、パリイされると極端に何も出来なくなるのだ。（上手い  
人もいるが）

そのため騎士団の中でも斬り込み役を担当するミルドレットは何  
を置いても急いで駆け付けなければいけないのだ。

頭に「ずた袋」を被る以外は胸と腰を申し訳程度の布で隠してい  
るだけなのだが、それでもミルドレットは騎士なのである。

「『人喰い』ミルドレット参る！」

手には彼女が尊敬する>審判者<の武器を模して造られた『肉断ち包丁』を持ち、町を目指して突っ走って行った。

「行っちゃったか……」。

じゃあ私も戦のことは可愛い妹に任せるとして、帰って寝ようかな」

妹が必ず勝つと信じ切っている姉>宵闇<はのんびりとした足取りで城へと帰って行った。

……のだが。

「……あれ？ 何でだろう？」

私は確か、城に帰ってベッドに横になって、そのあと……」

気がついたら>宵闇<はクリスタルゴーレムに取り込まれていた。

「ここからは出れないし、別に命の危険ってわけじゃないけど、このクリスタルゴーレム何を考えているのでしょうか？」

寝て起きたらモンスター『クリスタルゴーレム』に取り込まれている。

この状況で理解できる人間など、そうそういないだろう。

「場所は……滝ですね。

あ、向こうに首が沢山ある蛇がいる。やつぽー」

遠くに見える首のたくさんある蛇（竜？）の『ヒュドラ』にクリスタルゴーレムの中から手を振ってみると向こうもこちらに気づいて嬉しそうに頭を振ってくる。

どうやら好意的な存在らしい。

「国や妹がどうなったのか気になるけど……まあ、妹なら誰が相手でも勝てるでしょう。

私は誰かが助けてくれるまで、ここでのんびりしてようかな」

そうして>宵闇くがこのクリスタルゴーレムの中から出れるのは、今から200年後となるのだが、その事を>宵闇くは知らない……。



## 第2話：ウーラシールの姫君と人喰いの妹（後書き）

とりあえずまあ、ミルドレットは料理人。姉は自宅警備員（次期王女）

そんな妄想で書かれた作品です。個人的には>審判者<の出席を増やしても良かったのですが、それだとデモンズソウルの小説になっってしまうので名前だけの登場となりました。

ミルドレット側の話でもまた書こうかな。

彼女は裸の割にけっこうタフですし、クラーグ戦でもそれなりに役に立つのは彼女が神殿騎士、それもアンバサ戦士だからなのでは、と思ったからです。リジエネは使ってませんが。

途中で詰んだセーブや育て間違ったキャラが何人かいるので、二回しかクリアしていないと言っても、彼女とは何度も会っています。今度は国が滅びてからの200年間と『病み村』のみんなと仲良くするほのぼの系小説でも。

とりあえず朝からノリでまた書いてしまいましたので投稿しました。

一応、投稿初日と最終話では一日二話更新をマイルールにしていますので。

あと原作で>宵闇<さんに会った人は分かると思いますが、他のキャラが「クリスタルゴーレム」と呼ぶモンスターを彼女だけ「クリスタルゴレム」と呼んでいたので作中の表記はわざとです。

### 第3話：リカール王子の決意（前書き）

『不死の王子』リカールが不死になる前の活躍を書いてみました。  
ぶっちゃけ「リカールの刺剣」のモーションがカッコよすぎたの  
でw

### 第3話：リカール王子の決意

一人の青年がいた。その青年、自らの血統にも強さにも驕ることなく、ただ一人の騎士として生きようとしていた。

そう、これは『不死の王子』リカールの物語である。

「王子、この度は我々の村を御救い頂きありがとうございました」

「我ら一時は死をも覚悟しておりましたが王子の姿に勇気をもらいました」

「是非ともまたこの村にお立ち寄りください」

時刻は夜明け前のまだ薄暗い中、小さな村とはいえ、その村では村人全員が早くから起きて集まっていた。

一人の青年の旅路を見送るためだ。

「僕の方こそこの村の皆さんには、とてもよくしていただきました。弱きを助け、強気を挫く。」

それこそ騎士のあるべき姿であり、僕の理想とする生き方です。

また何かあれば何を置いてでも助けにきます」

村を離れる青年、王子リカールは村人たちの声援を受け、自分の力を必要としている辺境の村々を目指す。

「……僕は王子なんだ。」

王族は人の上に立つ存在であることを、その全生涯を以て証明し続けなければならないんだ。

王族としての存在を認められることにこそ価値があるんだ」

誰に言うでもなく、一人そう呟くりカール。

旅の前の父との会話を思い出しながら歩き続けた。

「リカールよ、貴様は間違っており。命を数、質、そういったもので考えてこそ真の王なのだ」

「父上、国とは民があつてこそその国。

質の優劣などなく誰もが同じ、そして数で命を割り切るようでは真の王とは言えないはずです」



リカールの祖国、特に変わったところがあるわけではないが、それなりの大きさを誇っている平和な国だった。

他国との関係も悪くなく、戦とも無縁の平和な国。理想的な国と言えよう。

だがそんな国でも災いは容赦なく人々を襲う。

どこからか現れた疫病ネズミの群れにより、この国は危機に瀕していた。

それもそうだろう。

騎士たちは戦のない世が続いたことによつて鍛練を怠り、王や貴族には、自分の領地、領民を守るといふ仕事すらも存在しなくなっていたのだ。

そしてそこを狙ったかのように湧いて出た疫病ネズミの群れ。

群れを率いるのは人間を大きく超える巨体を誇る毒ネズミ。まさにネズミのデモンと言つても過言ではないだろう。

そんなネズミに襲われた国は、騎士団が役に立たない以上最終手段に出た。

それは村ごと閉鎖し、疫病にかかった人間も、生き残つて尚、戦うことを諦めていない現地の兵も全てを見殺しにして村ごと焼き払うというものだった。

そしてそれを王家が率先して行うということに、この国の王子リカールは反発しているのだ。

「疫病に罹った者の薬なら『腐れ谷』という場所に大量に売ってくれる商人がいるでしょう！

人を越えた巨大なネズミとは言っても所詮はネズミ。戦って殺せばいいでしょう！

なぜ戦おうとしないのですか！？

なぜ民を守るべき僕達王族が犠牲を前提にしてネズミ共に屈するのですか！？」

「黙れリカール。

我が息子ともあろう者が感情的になるでない！

助けられるのならそれもいいだろう。

だがそれは不可能だ。我が国の騎士団ではネズミの殲滅は出来ない。い。

疫病に罹患した者全てに薬を与えることも金銭的に不可能だ。

出来ることと出来ないことを見極め、あくまで理性による判断が出来ないようでは王とは言えんぞ」

「父上、僕は犠牲を前提に考えられる王になりたいのではありませんせん。

確かに一人の人間は自身の手の届く範囲しか守れない。

ですが、僕が王子として父上の後を継いで次期王を目指しているのは国の全てをその手中に収める王になることが国全てを自らの手の届く範囲に出来ると思ったからです。

父上がそのような考えをなさるのなら私は王になどなくてもいい。いい。

今日より僕は一人の騎士として国中の民を、兵を、この手の届く

範圍全てを救って見せます！」

そう言つて王の言葉を待たずに立ち去る。

頑固な息子に一人取り残された王は、

「まったく、あ奴は分かつておらん。

王とはどういうことか分かつておらん。

だが……あんな考えが出来る息子を持てたことは父としては誇つてよいのかもしれん」

王は亡き妻を思い出していた。

息子リカールの言葉、力強さは、かつて王が惚れた一人の女性に瓜二つだったからだ。

「リカール……ワシは王として行動せねばならん。  
だがせめて……お前が志を貫き通せるよう祈つておるぞ」

こうしてリカールは城を離れ、各地辺境を転々とし始めた。

すぐに王の耳にも情報は届くようになる。

『王子、民を救うため自ら戦場に現る！』

その後の活躍は、たった一人の王子がやったには大きすぎる成果を挙げ、国内の生き残った民や兵、すべてに希望を与えるものだった。

王子リカールは一人の騎士であった。

### 第3話：リカール王子の決意（後書き）

ちなみにすでに疫病に罹った人への薬は、王子が『腐れ谷』へ行  
って婆さんを情でほだした……ってのは無理でしょうからせつせと  
ドロップアイテム目当てで雑魚狩りしたということ。

それでまあ、不死になってからは王子も例外ではなく、これまで  
の功績全てを無視した扱いの末に「北の不死院」に投獄。その後脱  
出し、「センの古城」にてアイアンゴーレム撃破に向けて腕を磨い  
ている内に亡者になってしまったのでは？ と考えております。

最初は『史上最強の弟子ケンイチ』の赤羽刀の話で秋雨先生とレ  
イピア使いの小物との戦いをリカールとアイアンゴーレムで再現す  
るのも面白いかと思ったんですが、それやるとアイアンゴーレムが  
カッコよすぎるのでやめましたw

書いてみますと、

「アイアンゴーレムか……知っているぞ。

素手で人間の雑兵を虐殺するためにデザインされた兵器だそうじ  
ゃないか。

突き刺しを主とする刺剣は君の弱点とみた！」

「ゴー（面白い仮説だね。では証明してくれないか？）」

ヒュヒュ（三回以上の連続突きは『リカールの刺剣』には無理）

「何！？ 前進したと見せかけて全力で下がっている！？」

「ゴゴー（この程度私にとっては低い問題だよ。というか君弱すぎ）」

「うわー」

こうして『不死の王子』リカールは掴まれて投げられて転落死し、なんとか生き延びたものの、人間性を失って亡者となりました、とさ。

人間とアイアンゴーレムの体格差じゃ、投げ技とか刺剣とか、そんなの抜きにしても普通の人間には勝てないでしょww

などと考えたりしております

まあ、これもフロム脳のなせる技ですね。

#### 第4話：一人ぼっちのビアトリス（前書き）

今回は『異端の魔女』ビアトリスについてのお話。

かなり私の想像によるものですが元々セリフのないキャラですしいいでしょう。

ギャグ成分は皆無です。

#### 第4話：一人ぼっちのピアトリス

あるところに一人ぼっちの少女がいた。

親も兄弟もおらず、喰いぶちはゴミをあさることで何とか食いつないでいた。

そんな少女はある日、自分に魔術の才があることに気づいた。

だがそれは、さらなる苦悩の日々しかもたらさないのだった……。

「消える悪魔！」

「異端者は死ね！」

「ゴミはゴミらしくしてろ！」

この言葉は全て大勢の大人がよってたかって一人の少女に向けていった言葉だ。

「ぐっ……」

少女は涙を堪えながら必死で逃げる。

大人たちはそれでも罵り、石を投げつけ続ける。



「見ろ、悪魔が逃げていくぞ」

「悪魔のくせに我々の魔術を学ぼうなどと生意気だ」

そう、少女は魔術さえ使えるようになれば自分もまともな人生を送ることが出来るのでは、と考えてしまったのだ。

だがそれは間違いだった。

ビアトリスは魔術学院を訪ねて魔術を披露したら入れてもらえると、安易に考えていたのだが、披露した途端に罵詈雑言が飛び交った。

結果、こうして追い立てられるようにして逃げている。

学院の人間は金もなく、ゴミの中から拾ったボロボロの布キレしか身につけていない少女を追い出したのだ。

『竜の学院』 ヴィンハイム。

魔術の名門として知られるその学院は確かに入学さえすれば誰もが一流の魔術師になれるだろうし、生活するのに困らない程度の金くらい、あっさりと稼げる。

だからこそ、自分たちと異なる者を拒絶する。

教えを乞う者ですら撥ねのける。

それはある意味、少女の才能を妬んでのことなのかもしれない。

ゴミの中で生活しているゴミのような少女が、幼い頃から裕福な生活と修行を積んできた学院の魔術師たちを越える魔術の才能を持っているなどと認めたくなかったのだろう。

ヴィンハイムに入学する生徒の大半は貴族などの金持ちだ。  
魔術を趣味で研究するような裕福な存在だ。

そんな中に身寄りのない少女が一人で行ったところで、こうなってしまうのは仕方がないだろう。

そう、仕方がないことなのだ。

「うつ……ぐす……」

少女が住処としているのは路地裏の一角にゴザを敷いただけの場所。そこが彼女の家だ。

少女、ビアトリスのたった一人の家なのだ。

「……もし」

場所が場所だけに、寄りつく者などほとんどいないこの場所にビアトリス以外の人物がいた。

誰もいないのを確認して逃げ帰って来たはずのビアトリスは、そのことに驚いた。

その男は目の前に突然現れ、自分に声をかけてきたのだから。

「君がさっきヴィンハイムに入学届を出してきたビアトリスちゃんかい？」

男は目深に被った帽子のために表情こそ見えないが、その口調からはビアトリスに対する慈しみを感じ、どこか暖かった。

「私は『ビッグハット』ローガン。  
君に興味があつて来た者だ」

その名前にはビアトリスも聞き覚えがある。

『ビッグハット』ローガンと言えば、魔術を極めた過去最高の魔術師である。

人嫌いで有名なために、あまり人前に姿を現すことはないと聞くんが、こうしてビアトリスの前に姿を現したのには何か理由があるのだろう。

「正直君の魔術の才能を見た時は驚いたよ。

服装などから、私も最初は、孤児が立身出世を目論んで才能は学院で開花させればいい、と考えるような魔術を金のためだけに学ぼうと考える馬鹿だと思っていたのだがね。

……まあ、君は孤児のようだし、金のために自分の才能を利用し

ようと思ったこと自体は悪いことではないのだがな」

思っていた以上に饒舌なローガンに驚きを隠せないのはビートルの方だった。

「単刀直入に言うと、私の弟子にならないか、ということだ」

なぜ自分が？　と言う思いを捨てきれないビートル。

先ほどの学院の魔術師から罵倒され、石を投げつけられる自分を見ていたのだろうに、そんな自分を偉大な魔術師ローガンが弟子に取るなどと信じられないのだ。

「あ、あの……なん、で……私なんかを……」

恥ずかしさから消えてしまいそうな小さな声しか出せないことも恥ずかしく感じて頬を赤らめるビートルを、ローガンはその両手で抱きしめ、こう言った。

「私の弟子に才能以外はいらない。

魔術を極めることに生涯を費やすことが出来る人間を私は求めているのだからな」

そう言ったローガンも頬が赤くなっていた。

抱きしめられて下から見上げる形となって、初めて見る事が出来たローガンの優しい笑顔にビアトリスはこう思った。

（ああ、この人も私と同じで寂しかったのかもしれない）

ローガンは魔術の大成のためにその生涯を費やしてきた。

実際、魔術で彼に比肩する者などおらず、学院だけでなく、あらゆる方面に対しての権力までも持っていた。

だが、その権力こそが彼を人嫌いにさせてしまったのだ。

自分に近づいてくるのは金のために自分を利用とする者。魔術を極めたいと言いつつもローガンを越えようとすら考えられない弱き魔術師。

そんな連中にほとんど愛想が尽きていたローガンは一人で魔術の研究をすることのみを生きがいとしていた。

ローガンは最初の内こそ声を大にして主張した。

自分はただの魔術師だ！ 魔術を極めること以外に何も考えていない、と。

それでも周りの反応は変わらなかった。

だからこそ彼はその特徴でもある大きな帽子で顔を隠した。人前に出ることを極力減らした。

だけど……寂しかったのだ。

一人でいるのは寂しい。そう思うことが大魔術師であるローガンには口に出すことすら出来なかったのだろう。

それ故に、自分と同じか、またはそれ以上の才能を感じたビアトリスに興味を持ったのだ。

「私の教えられる魔術を授けよう。

だがそれは表での権力や金とは縁遠いものになるはずだ。  
君は異端者になる。

それで良ければ私の弟子にならないか？」

ローガンの再びの問いかけに対するビアトリスの答えは決まっていた。

「はい！」

ビアトリスが欲しかったのはお金じゃない。

勿論、毎日の食事、安心して過ごせる住処、そういうものが欲しいわけではないじゃない。

しかしビアトリスが本当に欲していたのは『温もり』なのだ。  
『家族』が欲しかったのだ。

それは血のつながりではなく、金でもない。

自分と似た存在であるローガンが家族に思えたからなのだ。

こうして、大魔術師ローガンの弟子となったビアトリスは魔術師としては異端者として扱われるようになった。

だがそれでも彼女は後悔などしていない。  
彼女は一人ぼっちではないのだから。

#### 第4話：一人ぼっちのビアトリス（後書き）

あんな分かりにくい場所に召喚サインを出す恥ずかしがり屋なビアトリスが可愛くないはずがない！

思うにビアトリスがローガンの開発した魔術を使えるのには、彼の弟子だったという理由があるに違いないのですよ。

とりあえず、このあとの話を描くとしたらギャグになりそうなのでいい感じのラストとして、この話はここで終わりですね。

書くとしたら、

ローガンに『旅の靴』を勧められてドン引きのビアトリス。

ローガンのパンツを自分の下着と一緒にを洗うなと怒るビアトリス。

風呂上がりにパンツ一丁で歩く、ずばらなローガンを叱るビアトリス。

そしてビアトリスが最終的に『四人の公王』に挑んで闇にのまれた哀しみに打ちひしがれるローガン。

そんな話も書こうかな。書いちゃおうかな。もうビアトリスとローガンで1作品まるまる書いてみようかな。

……それはともかく、たぶんビアトリスの死がきっかけで、ローガンは新しい弟子を取るようになったと思うのですよ。

グリッグズさんはビアトリスを失った悲しみを癒すためだけの存在で、本当の意味では弟子としては認められていなかったのかもしれない。

結局はローガンさんも『公爵の書庫』で狂っちゃいましたし。

もしもビアトリスが生きていたならば魔術研究のためにシースと



同じ道を歩むはズがないのです！

このゲームの登場人物は大抵最後は狂って敵として出てきちゃいますからねえw

それとただ今、キャラの口調を思い出すために三周目をプレイ中なので更新頻度は遅くなりますので。

せめてキャラの一人称と二人称くらいは原作と同じにしないとギヤグとすら言えないものになりますからね。

## 第5話：ふたりはいつも（前書き）

今回は白竜シースについてのお話……と、『キングスフィールド』に出てきたその片割れとも言つべきギーラも出しちゃいますw

『ダークソウル』どころか『キングスフィールド』の世界観までいじっちゃってますが、まあ、意図的にやったことなんで

## 第5話：ふたりはいつも

むかーしむかし、ある所にとても仲の良い竜の兄弟（？）がおりました。

「ねえ、ギーラ兄さん」

「なんだ弟よ」

「僕、グウィン王と手を組むことにしたよ」

「そうか」

はるか昔、世界を支えていた三神の内の一柱、『大地の神』ヴァ  
ラドが自身を分裂させることで誕生した二匹の竜、『光の黒竜』ギ  
ーラと『闇の白竜』シース。

二人揃ってまあ、なんやかやあつてヴァーダイト王国という国を  
滅ぼしかけたが、アレフ・ガルーシャ・レグナス、それにライル・  
ウォリス・フォレスターという王家の人間にやられた。

……かに思われていたが、実は地底深くに潜って体力の回復に努  
めていたのである。

「僕らが寝ている間に地上の人間の世界はずいぶん様変わりして  
>古竜<? とか言うのが世界を支配しているじゃん。」

復讐相手のライルもアレフも死んじやったからやることなく、  
同じ竜だからって理由で>古竜<側についていたけどさ。

別にアレフとライル以外の人間なんてどうでもいいじゃん」

「確かにな。」

俺達兄弟が>古竜<に与するのは同じ竜だから、という理由だけで  
しかない。

だが、それでもグウィンに協力する理由はなんなんだ?」

「いやあ、僕の力を評価してくれたグウィンって人がさ、この戦が  
終わったら『公爵』の地位をくれるって言うからさ」

「確か人間の貴族と呼ばれる人種が用いる役職だな。」

だが『公爵』というのは王家の分家などの血筋が近い者が選ばれ  
るのではないか?」

「それなんだけどさ、どうもグウィンって人は人間というよりは神  
様って感じだし、神に人間の常識を当て嵌めるのもどうか?　っ  
て考えらしいよ。」

それ以前に貴族階級を名乗る人が他にいないんだから実際には称  
号みたいなものだね」

「ならば、シースはその称号が欲しいのか?」

「ははは、違うよ兄さん。

僕は今は亡き、ヴァーダイト王国の王子ライルに負けて鱗を失っちゃったからさ。

新しく鱗を生やす魔術の研究がしたいんだ。

そのためにグウィン王の人脈っていうのかな？　そういうのが欲しいんだ」

なるほど、と呟くギーラ。

確かにシースはかつての戦いによりその力とはかく、体が当時のような美しさを持っていない。

当時は人間のように四肢を持つ姿だったというのに、今ではいかにも竜の姿と、下半身を構成するのは尻尾を含んだ三本の触手だけ。

ギーラはダメージが少なかったために、力も姿もすでに元通りになっているが、シースはその時のダメージが大きすぎた。

ギーラの今一番の目的は弟の完全復活だ。

それは力と姿、両方を指す。

だが兄としてギーラも、弟を元の姿に戻してやりたいという気持ちはあるが、その思いとは裏腹に自分たちの魔力と時間経過による再生だけでは完全には治せないのだ。

まさにグウィン王の誘いはシースにとっては渡りに船だったのだ

ろっ。

「ならば俺もお前と一緒にグウィン王の側について戦おう。

俺達兄弟が手を組んだら>古竜<すら敵ではないのだからな」

こうして二匹の竜は共にグウィン王の軍門へと下り、そこからの戦は>古竜<側の圧倒的な不利な状況へと移行していった。

しかし、この世界の後の歴史に『光の黒竜』ギーラの名は記されていない。

誰も彼の名を語らない。

それは『闇の白竜』シースを、後に狂気の闇に堕とす出来事でもあったからだ……。

「うおおおおおおおおおー！！！！」

ギーラの発生させた光球から放たれる雷が>古竜<の鱗を貫き、シースも負けじと敵を討つ。

元々劣勢を強いられていたグウィン王の勢力は士気も高まり、そして……>古竜<は破れた。

「やったね兄さん。

これで戦は終わりだよ」

「そうだな。

とりあえず『アノール・ロンド』の端に俺達の研究用の書庫を用意してもらった。

世界中の魔術関連の資料も集められていると聞きし、これでお前の体も元に戻せるぞ」

兄弟は戦が終わったことにより浮ついていたのだろう。

自分たちに敵はいない。これからは兄弟仲良く平穏な日常を送ればそれでいいと考えていた。

……そう考えていたのは二人だけだった。

ヒュン

「ぐおっ！」

「兄さん!？」

突如として二人の前に現れたのはグウィン王。

そのグウィン王が『雷の槍』を放ったのだ。『光の黒竜』ギーラの協力の元に会得した雷の奇跡を……。

「シース、ギーラ、お前たちのおかげで>古竜<は倒せた。

だがまだお前たちが残っているのは真の平和は訪れない」

「グ……グウィン！ 貴様俺達を裏切るつもりか！？」

胸を大きく貫かれながらも怒りに染まった瞳で睨みつけるギーラ。

グウィン王はギーラの視線など何とも思っていないように話を続ける。

「約束通り半端者のシースには『公爵』の地位とその体の研究のための書庫をやるう。

だが私がお前から学んで会得するにに至った雷の奇跡を使えるギーラ、お前は生かしてはおけん。

ここで死んでもらう」

再び『雷の槍』がギーラを貫く。

グウインはすでに雷に関しては技を教えたギーラすら越えていた。

それでも自分を越える可能性のある者が存在することが許せなかったのだらう。

もしくは自分を越える可能性のある者が恐ろしくて堪らなかったのかもしれない。

それだけ竜というのはこの世界では脅威なのだ。



「シース、お前は書庫の中で永久に囚われつづけているがいい。  
お前は兄と違い、魔術の開発には秀でている。  
それにギーラと違って強さと言う点では我らの中で一番弱い半端  
者だ。

お別れだ、二人とも。

この世界の真の平穏のために礎となってくれ」

そうしてギーラはその場で殺され、シースは後に『公爵の書庫』  
と呼ばれる場所に閉じ込められた。

一人だけ生き残ったシースは、水晶により不死の力を植え付けら  
れ死ねない身体のまま人道に背く研究を続けた。

全てはグウィン王への復讐のために……。

それさえもグウィン王の力を強めていく行為であるとも知らずに  
……。

こうしてギーラの活躍は闇に葬られたのだった。

## 第5話：ふたりはいつも（後書き）

かーなーしーみのー……と、冗談はさておき、シースが出といて  
ギーラが出てこないはずがない！

仲が悪いように見えて実は仲の良かった二匹の竜は、『キングス  
フィールド』の二作目、三作目でそれぞれの主人公に倒されたあと、  
地底で体力回復に努めている内に仲良くなった、と。

シースとギーラは互いに争いあっていた仲の悪さに定評のある竜  
ですが、それは嘘。

実は仲が良かったのだ！ という妄想の末に生まれた話でした

好きな相手ほどいじめたくなるという小学生の心理ですね。

まあ、かなり長生きしているような二人ですけど。

昨日の話の後書きに書いたように、似た者同士のシースとローガ  
ンは同じ「大切な人を失った悲しみ」から狂ったのだと思います。

それとグウィン王は良い人って感じがしないので悪役向きですね。

そろそろプリシラの話でも書こうかな。

この作品はストックも何もなしで、その日その時の思いつきで書  
いているので思いつくまでは書かない気もしますが、いつかは書く  
と思いますので。

この話とは関係なく、実はシースがプリシラの父親で「パパ」  
「私の可愛いプリシラよー！」ってなノリの話でも書こうかな。  
でもプリシラの親は古竜だかグウィンだかって作中の指輪が何か

にそれらしい設定が書かれていたような……。

## 第6話：綺麗なペトルス（前書き）

皆さんはペトルスという人物をご存じでしょうか？

おそらく三番目に出会うNPCですので、殺したことのある人もおられるかと思います。

ある時は、意味の無い情報を、さも重要な話であるかのように偽って金を集める男。

またある時は、仕えている主を見捨てる男。

またある時は、その後逃げ返ってきた主を殺す男。

そんな悪人として名高いペトルスだが、この話はある一人の人間がペトルスをぶん殴ったところから始まる。

さあ、綺麗なペトルス物語の始まりだ！

## 第6話：綺麗なペトルス

「イツヘヘヘヘヘ」

免罪をご存じだろうか？

不死教会にある鐘を鳴らすと現れる、オズワルドという人物に多額の寄付をすることで、これまでに何かしらの理由で敵対してしまった人物に行った罪を消し去ることが出来るものだ。

殺していなければ必ず相手は、その罪を許してくれる。

だが……免罪とは、その人物の敵対するに至った出来事に関する記憶を奪うことで罪を消しているのだ。

とすると、どうなるか？

例えば、オズワルドに免罪を頼んだ人物がペトルスの顔に腹がたつたと言っただけの理由で殴ったのだとしたら。

例えば、ペトルスが自分を殴った人間に関する記憶と一緒に悪の心も失ったとしたら。

例えば、聖女レアに彼が最後までついていたならば。

あらゆる偶然によって起きるはずのない出来事が起きたとしたら。ペトルスは本当の意味で聖職者になれるかもしれない……。これはそんな、もしかしたらの物語です。

「さあ、行きましょう地下墓地へ」

一行のリーダーである女性、『聖女』レアは『火継ぎの祭祀場』での祈りを済ませると三人の従者を連れて使命を全うするために歩きはじめた。

従者三人の名前はヴィンス、ニコ、そしてペトルス。それぞれにレア個人は勿論、レアの家に長い間仕えてきた従者である。

「ところでペトルス。

お前今日はなんだか、いつもより神々しく見えるんだが、何かあったのか？」

「むーん」

ペトルスは普段は悪人面をしており、聖女として名高いレアの従者として似つかわしくないブ男なのだが、その日は何故か、普段と違って一段と輝いて見えたことにヴィンスが疑問を持ったのだ。

ちなみに「むーん」と言ったのはもう一人の従者ニコ。無口である。

「いえいえ、私ごときの醜い造形の顔をまじまじと見ては皆さんの目を汚してしまいます。」

特に体調にも問題はありませんのでお気になさらず」

ペトルスはそう言うが、彼の雰囲気は明らかにこれまでと違っていた。

「いえ、私もペトルスの顔が醜いのは常々思っておりましたが、今日はその………なんと言いますか、神のごとき波動を感じるのですが………」

レアはペトルスに近づき、何度も確認をするように見つめる。

ペトルスの別人であるかのように疑っているのだろう。

「お嬢様の言うとおりだ。」

ペトルス、お前今日は美しいぞ。

顔の造形の醜さは相変わらずだと言うのに何でそんなにも神々しいのだ」

「むーん」

ヴィンスもニコも気になるのは一緒のようだ。

それもそうだろう。

ペトルスの普段の表情は造形の醜さだけでなく、心根が腐った人物特有のドブのような薄汚いオーラを感じる悪人面なのだ。

これではまるで聖職者ではないか。

「私自身は別段変わった気がしないのですが……。

もしかしたら、これまでの祈りによって悟りを開いたのかもしれないね。

主よ、感謝します。『アンバサ』」

「ペトルスが神への祈りの言葉を！？

信じられません！

あの！ ペトルスが『アンバサ』だなんて……」

「こいつはきつとペトルスの偽物だ！

本物のペトルスなら絶対にこんな綺麗な言葉は言えるはずがない  
「！」

「むーん！」

散々な言われようだが、これでペトルスがどんな人物なのかは分かっ  
てもらえたのではないだろうか。



ペトルスは極悪非道で、聖職者の名を語る悪の権化なのだから、神への祈りの言葉を口にし、神々しい波動を放つ彼を、誰が本物のペトルスだと認めようか。

「そうは言われましても、私も特に身に覚えがありませんので……。確かに私は、自分が悪人顔というのは自覚していますが、それが神々しい雰囲気を放てるようになったというのはいいいことじゃないですか」

「……確かにそうかもしれませんね……」

「言われてみれば元々が酷かっただけで、聖職者にとって祈りの言葉を口にするのも、神々しく見えるのも普通のことだな」

「むーん」

それで三人は納得した。

ペトルスはかつて、自身が仕えるレアお嬢様と護衛仲間ヴィンスとニコが来る前に自分を殴った人間が、オズワルドに免罪を頼んだことで、自分の悪の記憶が失われたことに気づいていない。

それゆえに自分が悪人だったことにも気付いていない。

悪の心が消えたため、この日初めてペトルスは聖職者を名乗れる人間になったのだ。

まあ、それはさておき一行は地下墓地へと進んで行った……。

……

……

……

「おお、あんたらまでもだな？  
てえことは貴重な旅の仲間だ。  
俺はパッチ、よろしくな」

巨人墓場に潜った一行はパッチと名乗る人物に会った。

「はじめまして、私はレアと申します。  
使命を全うするためにこの地へと参りました」

ヴィンスとニコは、あからさまに怪しいパッチを警戒し、守るべき主のために、臨戦態勢は崩さない。

ペトルスもオズワルドの免罪によって綺麗なペトルスになってるのでパッチに関する記憶もないため、警戒を強めている。

レアが挨拶をしたのも、怪しげな男だが態度が怪しいからと言って疑っては聖職者として失格だからという理由であり、レア自身も

このパッチという男を信用しているわけではない。

「……そうだ、あそこにお宝が見えるだろう？」

あれ、あんたらに譲ってやるぜ。

まあ、友情の証ってやつさ」

しきりにペトルスに目くばせをしてくるパッチだが、綺麗なペトルスにはパッチに関する記憶がないのでその真意はつかめないでいた。

どうやら記憶を失う前は一緒になって、色々と悪さをしていたようだ。

「宝……ですか」

レアはとりあえず覗いてみようと思い、パッチが指し示す崖下を覗いた。

その瞬間！ パッチはレアに後ろから蹴りを入れた。

「あ……」

突然のことに驚いたレア。

だがその体は蹴られた勢いによって、無情にも崖下に落ちていく。  
ヴィンスとニコも慌てて助けようと手を伸ばしたが三人は一緒になつて落ちてしまい、残るのはペトルスとパッチだけとなった。

パッチの高笑いが場に響き、あまりにも突然の出来事にしばし呆然とするペトルス。

「よう、ペトルス。

お前は聖職者とはいえ、俺と同じゲスだからな。  
あいつらが死んだあと、いつもみたいに身ぐるみ剥いで山分けしようぜ。

「ウツヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ」

下卑た笑いは墓地に響き渡る。

この場にいるのが自分と同類のペトルスだからこそ、パッチもここまで余裕のある行動がとれるのだろう。

だがここにいるのは「ペトルス」ではない。「綺麗なペトルス」なのだ!!

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「……さねえ……」

「どうしたペトルス？」

「許さねえって言ったんだよお!!!」

「がはっ」

突如キレたペトルスに締め上げられるパッチ。

だが綺麗なペトルスの怒りはこんなものではない。

「私は聖職者だ。

この世に善と悪があることくらい分かっている。  
だがなあパッチ、てめえはその中でも一番やっちゃいけないえ、吐  
き気のする『悪』をやっちゃった」

締め上げる手に力を込め、そのまま壁に叩きつける。

パッチは自分と同類だと思っていたペトルスの豹変ぶりとまど  
っているようだ。

「『悪』とは、てめー自身のためだけに弱者を利用し、踏みつける  
奴のことだ!!」

ましてやレア様をーっ!

貴様がやったのはそれだ! あ~~~~ん!?

私が聖職者である限り、てめえは生かしちゃおけねえ!

だから、私が裁く!!!」

「ぐっ……『悪』だと？」

てめえがそれを言うのか！？

俺と同じ外道の癖して今更、聖職者ぶるのか！？

これだから聖職者ってのは始末におえねえ。

許さないのは俺の方だぜペトルス！」

ペトルスの手を振り払い、体勢を立て直したパッチは、その手に持つ槍と盾をしっかりと構えペトルスに向かっていく。

「俺は『幸運』のパッチ改め、『鉄板』のパッチ！」

この木材で作られたかのように見えるが実は『鉄板』を仕込んである『大鷲の盾』の防御の前で為す術もなくくたばるがいい。

後悔と懺悔の涙を流しながらなあ」

「確かに私は過去は悪人だったのかもしれない。

だが、聖職者に一番必要な神と人を信じる心を学んだ私に負ける理由など塵一つもない。

お前こそ悔い改めるのだ！」

ペトルスは奇跡『助言求め』を発動した。

この奇跡は異世界で書かれた旅の助言を多く見つけるための奇跡。

本来攻撃目的としては何の役にも立たない奇跡なのだが、ペトルスはあえて、この奇跡を使った。

「な、何だこりゃ？

耳が聞こえない！？

くそつ、ペトルスの野郎、何をしゃがった！？」

奇跡『助言求め』によって異世界から集められた助言の数々がパッチに張り付き、彼の視覚と聴覚を封じる。

「パッチ、お前を殺す意志は私の意思だ。

だが、実際に殺すのはお前に恨みを持った異世界の無念なる死を遂げた勇者たちの言葉だ。

その言葉を体に刻んで地獄に落ちるといい」

体に張り付いていた『助言』を消そうと暴れまくるパッチだが、耳に届くのは彼が騙して殺してきた人々の無念の叫び。

『俺が太陽だ！』

『やっちまった……』

『尻』

『攻撃しろ』

『この先、白くべたつく何かが必要』

繰り返し耳の中で響く亡者の声。視界いっぱい広がるコメント文。

パッチは暫し、のたうち回っていたが、そのまま転落死してしまっ

「悔やむなら自分の行いを悔やむんだ。  
それらは全てお前への恨みが巻き起こした言葉なのだからな」

ペトルスは神の奇跡を使い、足元に書かれていた異世界からのパッチへのメッセージをパッチに張り付けただけ。  
パッチはそのメッセージによって視界を遮られ、耳に届く怨嗟の  
声によって苦しみながら自ら崖から落ちていった。  
ただそれだけなのだ。

「そうだ、お嬢様は!？」

パッチが消えたことで崖下を覗きこむペトルス。

崖下には落下衝撃からか、気を失ったレアと、仲間のヴィンス、  
ニコの姿もあった。

どうやら無事のようにだ。

「良かった……。  
とにかく早く助けないと」

こうしてパッチを倒し、レアを救ったことにより、後に最初ペトルスと敵対した人間が『薪の王』グウィンを倒して火を継いだことにより、世界には平和が戻り、祖国へと帰ったペトルスは本当の意



味での聖職者として、その生涯を無二の主であるレアに忠誠を誓う  
ことで幕を閉じた。

綺麗なペトルス物語、これにて閉幕！

## 第6話：綺麗なペトルス（後書き）

『助言求め』をジョジョ第四部のスタンド、「エコーズACT1」みたいな使い方でパッチを自滅させたペトルス。

きれいなペトルスが書きたくて書いただけの話でしたw

私は物語に出てくる聖職者って、物凄い悪人か物凄い善人かのどちらかにはつきりと別れているので好きですね。

ペトルスのゲームでの罪状は、違法集金容疑、婦女暴行容疑、窃盗容疑ですが、この話ではプレイヤーがそこに至る前にペトルスと敵対し、記憶をこっそり消して綺麗なペトルスにしたので犯罪者ではありません。

パッチは聖職者に関しては例外なく嫌っていた気もしますが、まあここまでの悪人ならペトルスとも上手くやっていけそうですね。

## 第7話：うつかりリッケルト（前書き）

今回は『鍛冶屋』リッケルトのお話。

なんか今回の話とこれからの話（まだ執筆はしていませんが）で段々とこれまでに書いた短編と繋がりが出てきてしまいました。一応他の話を読まなくとも分かる話にしていきたいと思います。

短編だからこそ、まだ原作で会っていないキャラの話を読まない主義の人もいるでしょうしね。

それと防具の『チェイン』シリーズは女性が着るとボディラインが強調され、光沢が妖しげな色気を醸し出して素晴らしいので私は愛用しています。

まあ、防具としては微妙な性能なので基本的にはアナスタシア・カボタンさんの服着てますけど。

## 第7話：うっかりリッケルト

ヴィンハイムという魔術を教える名門校がある。

そこで修行を積んだ者は、それぞれに魔術師として活躍をしていき、裕福な生活を送ることが出来る。

それゆえに魔術師を名乗る者には、魔術学院であるヴィンハイムの卒業生が多い。

当然学院の卒業生には、魔術を武力として使うことで傭兵として稼ぐ者もいるし、学問として研究する学者になるものもいる。

これはその中でも変わり種、学院をトップの成績で卒業しながらも、魔術と鍛冶技術の融合を目指した一人の男の物語であった。

「さて、旅にでも出るか」

ある晴れた日。

別段理由があるわけではないが、男は突如そう言った。

「む？ リッケルト。」

貴公、旅に出るのか？」

男、リツケルトの側で本を読んでいた魔術師『ビッグハット』ローガンが尋ねる。

「ああ、俺は魔術鍛冶屋だが、この国に居てもこれ以上の先はなさそうだからな。

新たな鍛冶の可能性を見いだせる種火を求めて旅に出ようと思う」

「……そうか、しかし貴公の魔術を使った鍛冶の腕は国でもトップクラス。

いきなり居なくなつては困る者が大勢いるだろう」

「あんたがそれを聞くのか？ ローガン。

俺もあんたも自分勝手に生きているんだ。

自分の欲望に忠実になつた俺を止められる奴がいないことくらい分かるだろう」

『魔術鍛冶屋』リツケルトと『ビッグハット』ローガン。

この二人はそれぞれの分野、すなわち、魔術を鍛冶に使うことと、開発することに長けたヴィンハイムを代表する二人である。

リツケルトは鍛冶以外はどうでもいいという考えから、まともな会話が出来る人間は少なく、人間嫌いなローガンにとって、心を許せる数少ない友人である。

初めはお互いに趣味への情熱だけだったのだが、魔術をそれぞれのやり方で発展させてしまったために、この魔術至上主義の国において二人は絶大な権力などというものを得てしまった。

だからこそ純粋な鍛冶屋と魔術師であり続けるために世間からは離れた生活を送っているわけだ。

そんな似た者同士の二人が親しくなるのも自然ななげだろう。

そして今はリッケルトの家にローガンが遊びに来たという状況である。

「ふっ、それもそうだな。

確かに私としたことが考え過ぎだった。

それならば私も旅に出るとしよう」

「俺とあんたは旅に出るにしても目的が違っただろうけど、行き先は同じロードランだろ？」

まあ、旅先であつたら向こうでも仲良くしようぜ

それよりも……、あんた弟子をとったって聞いたが、その弟子はいいのか？」

「ピাত্রリスのことか？」

いやな、彼女は弟子に取った当初こそ、私のことを『師匠』と呼んでくれていたのだが、年月が経つにつれて、呼称が『パパ』に代わり、『お兄ちゃん』に代わり、今では私のことを『あなた』と呼ぶようになってしまったのだよ。

少しくらい離れるのも悪くなくろっ」

「お前……、それはずいぶんと可愛らしい弟子なんだな」

ローガンは弟子の変化の理由に気づいていないようだがりツケルトは目ざとく気付いて呆れてしまう。

これは気づけない方がおかしいだろう、みたいな。

そうして暫くの間、雑談を続けていたリツケルトとローガンだったが、ローガンが弟子にお土産として買う予定の最近オープンしたばかりの菓子屋の終業時間が間近だったのに気付いて慌てて帰ることになった。

「（こんな鈍感な奴だからこそ友人としては一緒に居ても楽しいのかもしれないな）」

鍛冶馬鹿のリツケルトにとってもローガンは数少ない友人である。

願わくばこの鈍い友人とその弟子の関係が進みますように、そんな願いを込めて友人を見送った。

「理屈をこねるのは学者であって、俺は職人だ。

とはいえ、その学者でもある友人は放っておくと理屈よりも先の展開に進みそうにないしな。

俺が手を貸してやるべきだろうか……」

ローガンが帰ったあと、ビアトリスにローガン名義で何か指輪的なものをプレゼントしようかとさえ考えるリッケルト。

だが、他人の恋路に第三者が手を出すのは善悪関係なしに面倒なことになるので止しておいた。

まあ、ローガンに対するビアトリスの愛情は本物だろうから放っておいてもいつかは関係が進むであろう。

「それよりも、俺も旅仕度を整えておかまいとな」

といっても別段荷物が多い訳ではない。

リッケルトが持つていくものは愛用の枕くらいだろう。

そもそも『魔術鍛冶』とは、術者の魔力を使ってすでに作成済みの武器に鉱石を融合させることであり、溶かした鉱石を鋳型に流したり、金槌で叩いたりといった作業を必要としない。

いわゆる永続的な付与魔術といったところだ。

そのためリッケルトが持つていく荷物が愛用の枕しかなかったことも当然のことと言えるだろう。

「一応書き置きも残しておこう。

依頼を受けた仕事は全て済ませてあるが、俺が何も言わずに国を飛び出したら他国に攫われたとか思われて戦争になってもいけないからな」



大袈裟に思われるかもしれないが、リツケルトの鍛冶技術によって作成された武器は、魔術師のように魔力の高い者が使えば一騎当千となり、魔力が低い脳筋戦士が使ってもそれなりの戦果が望めるのだ。

それは武器の性能だけで、雑兵を訓練された騎士団に匹敵する力を与えるに等しい。

それはともかく、こうしてリツケルトは旅に出た。

目指すは呪われた地『ロードラン』

た。

と、何やらウキウキしてきたリッケルトに声を掛ける者がいた。

「へえ、また一人この地に来たのか。

デーモンのソウルを求めたか？

それともこの地を救おうとでも？

ハハハハハ……」

「あんたは？」

篝火の側で佇む一人の戦士。

身に纏う鎧は高貴な生まれの騎士などが嫌う性能重視の『チエイ  
ン』シリーズ。

そして直剣と盾を使うオーソドックスな装備だった。

「俺は『青ニート二世』」。

まあ、この地でのあんたの先輩さ。

そんなことよりも、さあ、行けよ。

どうせあんたもデーモンのソウルのためにこの呪われた地に来た  
のだろう」

「いや、俺は鍛冶屋として新しい種火を求めてやってきた。

この地を拠点に新しく活動予定だからあんたも良ければ利用して

くれ」

リッケルトはデーモンのソウルなどに興味はない。

求めるのはただ一つ。

鍛冶屋としての新しい可能性だ！

「そうか、だが俺はいいよ。

この世界に怖気づいた俺はここにずっと座っているだけだから。  
何もないが少なくとも安全だからな」

思うにこの『青ニート二世』と名乗る戦士も過去に何かしらあつて絶望してしまったのだろう。

リッケルトとしては鍛冶仕事を依頼してこない奴ならば用はない。

「ならば気が変わったら俺に会いに来てくれ。

とりあえずこの辺で鍛冶屋が出来そうな場所を探してみるからさ」

そうして『青ニート二世』と別れたリッケルトは篝火の近くから、下へ降りる道を見つけ、そこからエレベーターでさらに降りてゆく。

「このロードランという地は、エレベーターがこんな辺鄙な場所にまで用意されているだなんて公共事業が上手く機能しているのか。

ヴィンハイムでは考えられないな」

こういう些細なところに祖国との違いを見つけ、見る物全てを面白がっているリツケルト。

そして雪着いた先、『小ロンド遺跡』にて自身の拠点となる店を構えようと考える。

そして考えた結果、周りの建物の石材を勝手に拝借して、自身の魔力を接着に使って組み立てたのはまだいい……が、内側から組み立ててしまったために建物の中に閉じ込められてしまったのだ！

「……ふむ、これは失敗したな。」

出入り口を作るのもすっかり忘れていたから出ることは不可能だ。だが、鍛冶仕事をするのにはここから出る必要はないわけだし、これはこれで構わないだろう」

そうして閉じ込められてしまったことをポジティブに考えたリツケルトは『小ロンド遺跡』にて鍛冶屋を始めることとなったのだ。……。

今日も彼の元に訪れる客はいない。

## 第7話：うつかりリッケルト（後書き）

逆に考えるんだ。「オチ無くてもいいさ」と考えるんだ。

……まあ、今回の話は『青二ト二世』さんがリッケルトの店の近くで亡者化していた理由に関してのお話でもあるわけですね。

思うに『青二ト二世』さんは二つの鐘を鳴らしたあとに「俺も本気を出すか……」みたいなセリフを言っていたので本気を出すために武器の強化のためにリッケルトを訪ねたのだと思います。

そして武器強化の依頼料金としてソウルが足りなかったので『小 Rond 遺跡』のボケーっとしている亡者たちを狩っていたら逆にやられてしまったと。

なんだかローガンの人間嫌いな雰囲気は薄れてきていますが、それは数少ない親しい人間は例外としているから、という設定で。

リッケルトはゲームの方ではローガンに会ったこともないような口調でしたがそれは嘘。

実はリッケルトとローガンは友人で、仲がいいのを知られると人間嫌いで通しているローガンのイメージを壊してしまうかも、と配慮した結果、プレイヤーに嘘をついたのだ！

伏線ってわけじゃなかったですけど、今回の話でも伏線っぽくなっているものはこれから先回収予定がありますので。

それと今日から『うたわれるもの』の二次小説も連載スタートですので良ければ読んでみてください

## 第8話：終わりを見届けた姫騎士（前書き）

今回はこの作品の第2話で、宵闇くさんと別れた後のミルドレットさんのお話といった感じで書いていこうと思います。

次話で「一人の料理人は熱き思いを胸に秘め、呪われた地、ロードランを目指す！ の巻」となるので、一応一話完結ですが次話のミルドレットさんの話でギャップを出すための少し真面目っぽい話になります。

## 第8話：終わりを見届けた姫騎士

瓦礫の山に一人立ち尽くす少女がいた。  
その頬を伝うのは一筋の涙。

顔は覆面で隠れてはいるものの、顎を伝って落ちてくるその雫は  
地面を濡らしていく。

「誰も守れなかった……」

すでに物言わぬ少女の父、それに共に国を守ろうと戦った騎士団  
の仲間たちの骸で溢れかえった戦場に佇む。

「何も守れなかった……」

少女が最も敬愛する最愛の姉も消えていた。

「私は騎士なのに……」

涙とともに口からこぼれ出た小さな言葉。

だがその言葉を聞く者は誰もいない。

そう、もう誰も居ないのだ。

「……何が騎士だ。  
何も守れなかったじゃないか!!」

少女、ミルドレットは涙した。

それでも、亡き父の言葉を受け継ぐために歩きだす。

---

すでに滅びてしまった国、ウーラシル。

そこは平和を愛し、魔術を生活に取り込むことで平穏な日々を送っていた。

そんな国が滅びたのには勿論理由がある。

調理師学校『ミルド神殿』があるこの国は優秀な神殿騎士を輩出することでも有名であり、他国からもこの学院に入学するために留学してくる生徒も多数いた。

そんな名の知れた学院が滅びたのだ。  
並々ならぬ相手だったのは想像に難くないだろう。



「許さないぞ！  
北の巨人どもめ！」

そう、ウーラシールを襲ったのは、はるか北に位置する巨人の国より来た巨人たち侵略者である。

ウーラシール独自の魔術を狙っての行動だろう。

何人もの魔術師が連中に攫われていき、騎士たちは皆殺しにされた。

ミルドレットはの中で唯一生き残った、ウーラシールの最後の生き残りである。

それは自ら戦場に出て指揮をとっていた国王である父のおかげである。

娘を守るために散った父親の愛がミルドレットを生かしたのである。

姉である>宵闇くと別れたミルドレットは、火の手が上がっている戦場に直接向かった。

そしてこの国に襲ってきたのが 北に住まう巨人たちだと知ると、早々に戦いで勝つことを諦め、王族としての責務として、一人でも多くの民を逃がすために奔走した。

それは王族として勝つことよりも守ることを優先した結果であり、

この時点では最良の選択だったのだろう。

相手の注意を惹きつけ、巨人の足の腱を自慢の大包丁『肉断ち包丁』で切断し、倒れた相手の喉を掻き切ることと殺してまわり、圧倒的数と戦力を誇る巨人軍を圧倒しながらも、民を逃がすことを第一に考えて行動していた。

だが、そんな彼女を脅威に感じた巨人たちは、ミルドレットを取り囲み、集中攻撃を仕掛けた。

さすがに捌き切れなかったがミルドレットは耐え抜いた。  
すべては民を守るために。

その一心で歯をくいしばって全身を絶え間なく襲う痛みにも耐えた。

痣だらけになりながらも、その体を血で赤く染めながらも、最後まで巨人の攻撃を一身に引き受けていたミルドレットの雄姿は騎士団の士気を高め、このままいけば民は逃げ切れる、こちら側の勝ちだとさえミルドレットは思った。

「負けるなミルド騎士団！

敵は巨人とは言え、あと少し持ちこたえればこの戦は我らの勝ちだ！

今こそウーラシールの騎士としての誇りを見せつける時ぞ……！」

現場で指揮をとる父、ウーラシール国王の言葉の言葉が聞こえたミルドレットはより一層苛烈な戦いに臨んで行った。

それを合図に仲間の騎士たちも巨人に向かって行くが、それは間違っていた。

巨人たちはまだ奥の手を隠し持っていたのだ。

「……なんだあれは？」

急に空が翳ったことに疑問をもったミルドレットは空を見上げた。

次の瞬間、彼女が目にしたのは巨大な物体。

そして轟音とともに響き渡る激しい爆発音。

「ぐっ……飛び道具。」

それも爆弾だと！？

巨人どもにそんな知恵があるというのか！？

巨人に知恵があるとは思えなかった。

しかし事実として目の前で起こっているのは、敵軍が味方であるはずの前衛で戦っている巨人兵諸共ウーラシールの騎士たちを殲滅しようとしている光景だった。

ミルドレットもさすがに今度ばかりは自分の生を諦め、死を覚悟した。

だが、そんな彼女を庇った存在がいた。

「ぐおおお」

「父上!？」

彼女の父、ウーラシル国王が娘であるミルドレットに覆いかぶさる形で爆弾の被害を防いだのだ。

「どいてください父上！」

父上は生き延びて一人でも多くの民を守るために指揮をしていた  
だかなくては！」

普段は冷静なミルドレットは慌てた。

誰よりも優しく、それでいて王としての武力、頭脳、すべてを持った尊敬する父が自らの身体を盾に、ミルドレットに降り注ぐ爆弾による炎を防いでいることに。

「ミルドレット……この国はもう終わりじゃ。負け戦じゃ。

僕は王でありながら民を助けることなど出来ん駄目な王じゃった。じゃがな、こんな僕でもこのウーラシル王国に住む一人の人間として、一人の父親として娘一人くらいは守って死にたいのじゃよ」

今もなお降り注ぐ爆炎と瓦礫を一身に受けながらも笑顔でミルドレットに微笑むウーラシル王。

「父上！

私は父上に死んでほしくな」言うなミルドレット。これでいい、これでいいのじゃ……」父上……」

巨人たちは爆弾で国を一掃すると北へと帰って行く。

足音が段々と遠ざかる。

地響きのような足音が完全に消えたのを確認すると、ウーラシル王はミルドレットの上からどいた。

それは最期に振りしぼった力が抜けて、崩れ落ちたと言ったほうが正確なのだろう。

「……良かった。

何も守れなかった儂じゃが、愛する娘だけは守れた」

すでに死は目前と言えるだろう大怪我を負ったウーラシル王。

そんな重体ながら出てくる言葉は娘を心配する言葉のみ。

「うう……ち、父上……」

「泣くなミルドレット。

儂は助からんがお前は生きておる。

この悲劇を二度と繰り返さぬように生き延びてくれ……。そして伝えるのじゃ……」

とめどなく流れ落ちる涙を拭うこともせずにミルドレットは父を抱きしめる。

「良いか、ミルドレット。

巨人たちはウーラシルから魔術を盗むことを目的に侵略したよ  
うじゃ。

とすると他の国も狙うかもしれん。

お前はこのことを西のヴィンランド家と東のシバ家に伝えよ。

このウーラシルが滅ぼされた以上、西と東が手を組まなければ  
北の巨人連中は倒せない。

連中はさらなる欲望を我ら以外の国にも向けるやもしれぬ  
それだけは何としても防ぐのじゃ！

このウーラシルの悲劇を繰り返してはならぬ！！」

「……分かりました父上。

必ずやこの国の悲劇を、これ以上繰り返さぬために！……私は  
行きます」

「……ああ、儂は自慢の娘をもったもんじゃ。  
これで安心して逝ける。  
なあに、向こうで死んだ仲間たちが待っていると思えば死も悪くないもんじゃ」

自分の死を理解しながら尚、笑顔を見せるウーラシール王。

「お前の姉、>宵闇くものんびりしておるが芯が強い娘じゃ。  
あの子も儂の自慢の娘じゃから生きていればどこぞに逃げ伸びておるであろつ。

ミルドレット、お前には苦しい役目お押し付ける形になるが、後のことを頼む。

愛しい娘ミルドレット、儂の自慢の娘……じゃ……よ……」

ウーラシール王は死んだ。

ミルドレットは父の遺体をその場に横たえると、自らの使命を果たすために歩きはじめた。

巨人たちへの復讐と、二度と連中による被害を出させないために。

---

こうして西のヴィンランド家、東のシバ家という大陸を代表する

騎士の名家にミルドレットは頼みこみ、歴史上はじめての東西合同による連合軍が作られ、北に住まう巨人の国へ一斉攻撃が仕掛けられた。

その中でも目覚ましい活躍をしたヴィンランド家は『ブラムド』と呼ばれる常人では持ち上げることすら不可能な巨大な鎚で幾人もの巨人を屠り去った。

その勇猛果敢な姿に感銘を受けた、当時はまだ見習い神殿騎士だったリロイ 後の『聖騎士』リロイもブラムドを模倣した武器を使い始めたことから神殿騎士の装備には大槌も多く使用されるようになった。

東のシバ家も活躍をしたものの、この戦によってシバ家当主は戦死し、保有する騎士団もほとんどが死亡。

事実上シバ家は壊滅したために、この戦で最も戦功を挙げたヴィンランド家ばかりが持て囃されるようになった。

そのためシバ家の僅かな生き残りからは恨みを買ったりもしたが、それは別の話となる。

だが、この戦での本当の功労者はウーラシル王国ただ一人の生き残りである姫騎士ミルドレットだろう。

彼女の迅速な行動により、東西は素早く連合を結成し、北の巨人たちは殲滅されたのだ。

この大陸に平和がもたらされたのは彼女がウーラシルの悲劇を伝えたからだ。



そしてミルドレットはウーラシール王国の崩壊の際に生き別れた姉を探すための旅に出ることとなった。

復讐を終えたミルドレットの旅はここからが始まりなのだった。

## 第8話：終わりを見届けた姫騎士（後書き）

この話続きます。

次話でミルドレットがメインの話で『病み村』へ至るまでの話を書いていこうと思いますので。

それに混沌の姉弟たちもそろそろ出したいですしね。

思うにこれが理由で『デモンズソウル』では巨人の要石が使えなかったのではないかと思います。すでに崩壊していたからという理由で。

それに東のシバ。彼はきつと高貴な生まれながらも家が潰れたので戦の時の借金とかなんやかやで屋敷も爵位も売り払って没落して盗賊団に身を落としたのかもしれないね。

自己紹介で「東の〜」と名乗った時点で一番最初に考えたのがヴィンランド家との関係でしたもので

それと『ダークソウル』のトロフィーが94%になりましたー  
あとはレア武器コンプと奇跡コンプの銀トロフィー二個と、トロフィーコンプによるプラチナトロフィー一つだけ！

頑張る私！！！！

## 第9話：ようこそ『病み村』へ（前書き）

ミルドレット、呪われたロードランの地を踏む！

そして『病み村』キヤラの話へそのまま移行するために今回でもミルドレットの話は終わりませんでした。

それにしても、ゲームの方でミルドレットさんの顔をまじまじと眺めようと『遠眼鏡』で観察するとずりずりと後ずさって上手く覗けない……。

もしかしてミルドレットさんは恥ずかしがり屋！？

## 第9話：ようこそ『病み村』へ

しばらく旅を続けたミルドレットは、魔術の名門ヴィンハイム学院の近くに腰を据えてお菓子屋さんを始めていた。

突然の展開と驚くなかれ、これにはちゃんと理由があるのだ！

「いらつしゃい、おや？ ローガンさんまた来たのですか」

それはすなわちこの地での権力者や有力人物から行方不明の姉の情報を得ることである。

「私の弟子がここのお菓子を気に入ってな。

狩って来なければ私のパンツを全部焼き払うと言うもんでな。

まったく……何の変哲もない旅人の標準装備だというのにビートルスめ……」

『ビッグハット』ローガンも彼女の店の常連である。

来るたびに、よく弟子の話をするが、ミルドレットとしては彼の弟子、ビートルスの考えには賛成だったりもする。

何の変哲もないか言いつつ、彼の足を守る装備『旅の靴』は変態性に溢れすぎなパンツであり、それを愛用しているローガンの変人ぶりがよく分かる装備だからだ。

「……それは大変ですね。」  
それよりも、私の姉の情報は何かつかめましたか？」

これも毎回聞いているのだがあまり情報は集まらない。  
もしも姉が生き延びているのなら、滅びてしまった国の代わりに  
自分でウーラシールの魔術を外部に伝えようと魔術師の多い国を転  
々すると思ったからだ。

失われるには惜しい魔術をウーラシール国は多く保持していたの  
だからその数少ない使い手である>宵闇くが広めないはずがない。  
そんな考えからミルドレットは旅を続け、あちこちで料理人とし  
て修業していた。

そして国を巨人の襲撃で失ってから数年、料理人として腕を磨き  
ながら姉の情報を探す旅で、世界中の調理技術を学んだミルドレッ  
トはヴィンハイムで店を開くと世界中から情報が届けられるようにな  
った。

そして何故、料理屋ではなくお菓子屋をやっているかについての  
理由だが、ミルドレットの料理は何を作ってもすぐに売り切れるか  
らだ。

その中でも金持ち貴族が多いこの国では、ミルドレットの作る美  
しさと美味しさを兼ね備える特別な菓子が一番人気であったのだ。  
そこで最初こそ料理屋も営んでいたミルドレットだが、途中から  
お菓子専門として情報収集に励んでいるのだった。

「ふむ……、貴公の姉かどうかは分からぬが、呪われた地『ロードラン』にあるという『白竜』シースが住まう『公爵の書庫』と呼ばれる場所に金色に光るクリスタルゴーレムがいるそうだ。

もしかこれが貴公の姉と関係があるのではないだろうか？」

「なるほど、確かに姉はモンスターから好かれやすい体質だ。クリスタルゴーレムに取り込まれての旅をしている可能性もあるな」

こうして客として来る魔術師たちから情報が集まるわけである。荒唐無稽な役に立たないガセネタばかりではあるものの。

だが世界各地の食文化を独自の技術で昇華させたミルドレットの腕は『ビッグハット』『ローガン』『鍛冶屋』『リッケルト』などの権力者からも気に入られるほどで、店としては開店以来ずっと右肩上がりの売上なのが続いている。しかし姉を探すことを第一に考えているので稼いだ金も大半が傭兵などに各地への探索以来として消えている。

そうして得た情報の中には今回のローガンの情報のように呪われた地、ロードランに関する者が多いのだ。

その名の通り呪われた不死者が集まる国であることから、傭兵たちもそこには行けていない。

なのでミルドレットはまた旅に出ることにした。

国を出る時は大勢の魔術師たちに惜しまれながらも感謝の言葉とともに見送られ、胸に熱い思いを宿したミルドレットは希望に満ち

溢れた生き方を送れていた。

途中、姉の存在を忘れてしまう時もあったのは秘密

「ミルドレットさん。

またこの国にも来てくださいねー！」

「この国はいつでもあなたを待っています」

「お姉さんを見つけたらまた戻ってきてくださいねー」

思わず涙を流してしまうミルドレット。

祖国を失ってから人は人との出会いを大切にしてきたミルドレットは、ここ数年の間にこの地でかけがえのない友情を育んでいたのだ。

「ふふ、姉上を見つけたら、またこの地に来るのも悪くないな」

次なる目的地は呪われた地、ロードラン。

ようやく彼女の冒険の前書きが終わろうとしていた！

巨大なカラスに運んでもらってロードランに来ることは出来た…  
…のだが。

「うーん、迷った」

現在迷子である。

「やはりカラス君には一番近くの篝火火までは送ってもらわなければならない。  
陸地が見えたからそろそろ降りても大丈夫だろうと思って飛び降りたのは失敗だった」

ミルドレットが巨大カラス便から途中下車した先は川だった。

幸いにも浅かったので溺れることはなかったが、その川は両端が  
反り立つ岩壁となっている。

「これは登るしかない！  
料理人らしく！！！」

目の前が岩壁ならば登りたくなるのが料理人というもの。



生まれたお国柄のためか、ミルドレットは年を取るとともに樂觀的かつその場のノリによる行動が増えてきていた。

そしてそのノリによる行動を実現しうるだけの實力までも兼ね備えてしまっているというのだから凄いものだ。

ちなみに彼女はすでに不死者となっているので死なない。

「あー……、あんたは誰だ？」

岩壁を登った先には洞窟があり、せつかくだからとその中に入ると見張りのつもりなのかデブなモンスターが居た。

「ここは『病み村』と言います。  
貴方は観光客ですかー？」

「……まあ、観光客と言えば観光客だな。  
行方不明となった姉を探しているうちにこの地に辿りついた。  
よければこの地の代表者に会って協力を頼みたいのだが」

「分かりました、ではどうぞこちらへ。

あ、申し遅れました。

私はこの『病み村』の『飛竜の谷』経由の入り口の門番をさせて  
いただいているミスズと申します。

これでも一応女ですので」

紳士的な礼をする見た目とは裏腹に礼儀正しいデブモンスターのミスズ。

彼女はこの『病み村』という場所では、それなりの地位にあるのか、他の同僚らしきモンスターたちに通りすがりに敬礼をされていた。

「アハハ、私の信念は『無知は罪なり、無視は悪なり』でして、部下にもそう教育をしていたら私の顔を見ると敬礼のポーズを無意識のうちに取るようになってしまったのですよ。

気にしないでください」

「……そうか」

いわゆる鬼軍曹な人なんだろう。

ミルドレットの祖国、ウーラシルでも国王直属の近衛騎士団の団長が『好奇心は猫を殺す』や『ダイスンスーン』などとカッコつけたセリフで部下に教育を施していた光景を思い出す。

「（そういえば彼は元気なのだろうか……）」

戦の最中、彼の姿を見ていなかったが、もしも生きているならまた会いたいものだ。

「おや？　どうかされましたか？」

「いや、何でもない。」

ただ少し昔を思い出していただけさ」

そうしてその後は大した会話もなく、ミスズに連れられて『病み村』の下層エリアに降りていく。

「凄いなここは。」

こんな場所にエレベーターまで用意してあるとは」

「ええ、この地を統治なさっている『混沌の魔女』クラーク様の計らいで、観光客を集めるにはサービス精神が大切だ、ということになっているのですよ」

正確には観光客から人間性を奪うのが本当の目的なのだが。

その『混沌の魔女』の妹さんがテーマパークみたいな楽しいことが大好きという性格なために、実際にはテーマパーク化を目指しているのだそうだ。

下層へと降りていくエレベーターの動力源をしている赤い犬と目があつたが物凄い爽やかな笑顔をミルドレットに見せてきた。

あの赤い犬の彼は、自分の仕事に心から満足しているのだろう。

「では着きました。

私は持ち場に帰りますが、この先にこの村の統治者がいるので、どうぞお会いください」

「門番と言う割には素性も知らない観光客をすんなり通すんですね。自分で言うのもなんですけど、私けっこう怪しいと思うんですが」

ここまでの対応から、ミルドレットは門番のミスズは主への忠誠心が高いと思っていたのだが、自分を主の部屋の前まで送り届けただけで仕事に戻ろうとするのに疑問を持った。

ミルドレットの現在の格好は頭には目のところに穴の開いた『ずた袋』を被り、手には大きな包丁を持っている以外裸である。

一応胸と腰は女としての最低限の恥じらいから布を巻いてはいるが。

「いえいえ、疑問に思う必要はないですよ。

ただ単純にこの地の主であるクラーグ様はこの『病み村』で一番強い御方なので、もしも貴方が無礼を働いて戦闘にでもなれば私がいてはクラーグ様が本気を出せませんからね」

なるほど、と肯くミルドレット。

そうしてミスズが帰って行くのを見届けると、ミルドレットは部

屋の前の霧を潜って中に入った。

## 第9話：ようこそ『病み村』へ（後書き）

門がないのに門番とはこれいかに？

その答えは彼女自身が「門」だから！！！！

最初に私が『病み村』に『飛竜の谷』経由で行った時、あのデブ三匹に襲われて何度か殺されちゃったので、あれが女性だと思えば少しアタックが過激とはいえ、モテモテ気分になるのでは？ という考えからあのデブモンスターは女性という妄想をしてみました。

が、男女平等な私は相手が女性だとしても殺されれば腹も立つのですがw

「おどりやー、ここまで前の篝火から走ってくるのにどれだけ時間かかっと思っとなのじゃー！？

というかこのゲーム無駄にエリア広すぎじゃー！！！！」的な

最初の頃は走り抜けて少し先にある梯子を下りれば勝手に飛び降り自殺してくれるのも知らなかったのだ。

それと思うにミルドレットはこの村の人たちと仲がいいのだと思います。

次話はアットホームなのんびりした雰囲気の話になると思います。

漫画で言うならば『みなみけ』に弟キャラを加えたような感じでしょうか。6人姉弟ですが。

混沌の苗床、クラーグ、グラナ、クラーナ師匠、混沌の娘、爛れ続ける者……段々とメインがこの6人に代わります。

あ、そういえば>爛れ続ける者<が見守っている死体は『黒糸金』シリーズ装備してましたし7人姉弟なのかな？

OPではイザリスの魔女ってけっこうな人数いましたけど、詳しくは分からないのでそこら辺は適当にいきます。

## 第10話：やみ むら（前書き）

ゲーム『プリニー2』で、『魔界戦記ディスガイア』シリーズで特に私の大好きな『呪術師』ちゃんの崇拜する邪神ドウルバルキーの姿を観た時は、思わず「なるほど」と納得したヨイヤサです。

そんな感じで『病み村』編、ミルドレット視点序幕、はっじまってるよー



## 第10話：やみむら

霧を抜けて『混沌の魔女』クラীগの住処に足を踏み入れたミルドレット。

「お、いらっしやい。」

この村に客だなんて久し振りだからゆっくりして行つてちょうだい。

あたしは『混沌の魔女』クラীগよ。よろしくね」

意外にも広い部屋。

その奥から現れたのは腰から下が蜘蛛のような姿をした美女だった。

夜の闇のような艶やかな黒髪をポニーテイルに縛り、右手に剣を持っているが、左手には大根を持っていた。

「ん？ ああこれね。」

今ちようど食事の準備していたからさ。

家の裏手で野菜育ててるんだけど立派な大根だろ？」

「確かに太くて立派な大根ですけど……この村って毒の沼があるのに野菜なんて育てても大丈夫なんですか？」

「この部屋付近はあたしの糸を張り巡らすことで土を浄化しているから大丈夫さ。」

あたしの妹がちよつと身体が弱いんだけどさ、美味しい野菜を食べさせてやりたくて始めたんだが、それがきつかけで今では野菜作りにハマっちまってねえ」

なるほど、とミルドレットは思う。

ミルドレット自身も料理人として修業する合間に、野菜作りをしたことがあるが、意外とハマるものなのだ。

そして料理人であるミルドレットには見ただけで分かる。

クラーグが持つ大根……それが彼女の野菜作りの力量がどれだけ高いのかを！

「（ゴクリ）」

あまりの立派さに胸を高鳴らせるミルドレット、この地の主がまさか超一流の農家マスターだったとはまさに僥倖だ。

「そんなことよりも……ようこそ『病み村』へ。」

この地の統治者として歓迎するよ……えーと」

「ああ、名乗り遅れました。」

今は亡きウーラシル王国の第二王女、『人喰い』のミルドレットと申します。

この度は行方不明の私の姉を探すのに協力していただきたくやっ

てきた次第です」

「ウーラシル王国……ね。

聞いているよ。確か北の巨人に襲撃されて壊滅されたそうだけど  
生き残りがいたのか……。

あたしも家族離れ離れになっているからその辛さはよく分かる  
ぜ！

よっしゃ！ あたしに任せろミルドレット！

必ずやあなたの姉さんは見つけ出してやるよ」

何やら一人で熱くなっているクラーグ。

どうにも上に熱い人のようだ。

「とりあえず協力していただけるようで、ありがとうございます。

それでは今日は私が料理をさせていただきませんか？

それでも私は料理人として大陸中を旅していたので腕には自信が  
ありますので、それほど立派な大根を見せられては腕が鳴るのです  
よ」

ついにミルドレットの本性が出た！

彼女は姉を探す旅と言いつつ、料理人として各地を転々としてい  
るうちに料理人のついでに姉を探すという目的と手段が入れ替わっ  
てしまうという結果になってしまった。

すなわち今のミルドレットは真の料理人！

彼女の炎の如き燃え上がる料理への情熱はクラーグの大根によってさらに燃え上がってしまったのだ。

「はは、その言葉を待っていたよ。

あたしも料理の腕には自身があるけど、『人喰い』ミルドレット  
と言えば料理界では知らぬ者のない達人だそうだからね。

実のところあなたの料理が食いたくて「お姉ちゃん、お腹減ったよ」……たく、『混沌の娘』め。ちよつとくらい我慢しろってんだ」

クラーグとミルドレットの会話を遮ったのはクラーグの巢のさらに下からだった。

「ああ、今の声はあたしの妹さ。

あいつは7人姉弟の中では末の妹だね。

ついで他の奴らも揃って甘やかしちゃったもんだから、いつまで経っても子どもっぽいまんなだよ」

そこが可愛いから甘やかすのを止められないのだが、と付け加えるクラーグは何とも幸せそうな笑顔だった。  
シスコンなのだろう。

「なるほど……ではその妹さんを満足させるような料理を私が見事作って見せよう！」

料理とは！ 一に基本、二に愛情、そして三、四で技術と材料をそろえたならば最後に行きつく極地というものがある。

その高みに上り詰めた真の料理人の技をとくとご覧あれ！」

「まあ、熱くなるのもいいけどキッチンに行つてからな。

それに妹も腹減らしてくれてるし、そんなに手の込んだものでもなくとも「お姉ちゃん、ま〜だ〜？」……今から作るからもう少し待ってくれよー！

それじゃ、あとは頼んだ」

こうして料理人として活躍の場を与えられたミルドレット！

この先、クラーグ達からの協力を得るにはここで上手く実力を披露しておかなければ人間関係的に苦労することになるだろう。

はてさて、彼女の旅はこれからどのような展開を迎えるのだろうか……。

「お腹減ったよ〜」

とりあえずは妹さんのご飯から作っていこう。

## 第10話：やみ むら（後書き）

これにてミルドレットメインは終わりますが、今度は一転してクラーグたち混沌姉弟の話となります。

時系列が適当ですが、本来の設定を想像すると、『混沌の廃都イザリス』で炎の探究をしている時に姉弟の誰か（たぶん長女が妹たちを逃がすために犠牲になったと推測）が、混沌の苗床<に取り込まれてしまったので、クラーグさんと、混沌の娘<は逃げ出して『病み村』に巣を作り、グラナさんは取り込まれた姉を殺そうとやってきた人間を排除するためにイザリスに残り、クラーナさんは真つ先に逃げたことを後悔しながらも姉や妹に会いに行くのを躊躇い、弟子をとって過去を忘れたがり、>爛れ続ける者<はその時死んだ姉の一人の墓を見守っていたと。

そんな感じですかね。クラーグさんは かぼたんみたいに唇と黒髪が色つぼくて好きですけど、私は断然>混沌の娘<さん一筋ですね！ おもに乳が！！！！

誓約も『混沌の従者+3』がデフォです。

それにしてもレベル99なために暗月部隊になっても侵入出来ないの『奇跡』コンプのトロフィーが取れない！

面倒なので最後の最後でトロフィーコンプは諦めそうです……。

というかダークソウルはフィールドが広すぎて移動が面倒臭すぎ！

## 第11話：こんとんけ（前書き）

何やらクラーグがメインで書きたかったのですが、すっかり影が薄くなってしまうましたw

とりあえず書いてみましたので読んでみてください

というかサブタイ、語呂悪う……w

## 第11話：こんとんけ

ここ、『病み村』に居を構えるこの地を統治する混沌家の朝は早い。

姉弟たちの住処があるのは、『病み村』と『デーモン遺跡』を繋ぐ、ちょうど中間地点であるが、その中でも長女である＞混沌の苗床くは自分で動くことが出来ないの、『混沌の廃都イザリス』にて三女のグラナと一緒に残っている。

それに末っ子の弟、＞爛れ続けるものくは体が溶岩で包まれているため巣には入れない。

彼は姉たちが、その爛れ続ける体を哀れに思ってプレゼントした「溶岩ダメージを軽減する指輪」をどこかに無くしてしまったので仕方がないとも言える。

まあ、その失くした指輪が元となって生まれた＞百足のデーモンくをペットにして仲良くしているそうなので、体が燃えることになった弟にはペットがいる生活の方が楽しいのだろう。

巣を通って外に出てみると、遠目に見える＞爛れ続けるものくはとても楽しそうである。

四女クラナは恥ずかしがり屋なために巣には入ってこず、巣のすぐ近くにて適当に生活している姿を『病み村』門番隊の隊員たちによって何度かその姿を目撃されているが一向にクラナたちに会いに行こうとしない。

そして末の妹＞混沌の娘くなのだが……、



「お姉ちゃん、お腹減ったよ〜」

「はいはい、いまミルドレットがご飯作ってくれてるからもう少し我慢してー」

「妹様、もうしばしお待ちください。」

このミルドレットが腕によりをかけた最高の料理にて、貴方様に『ンまあーい』と言わせて見せますので！」

こんな感じである。

すっかり『病み村』専属の料理人となったミルドレットとも実に仲良く暮らしている。

ミルドレットはミルドレットで、クラーグが作る最高の野菜を使って料理することに幸せを感じていたので本来の目的である姉探しはすっかり忘れてしまっていたりする。

ちなみにミルドレットだけではないが、この地に住まう者は皆、『混沌の従者+3』という誓約も済ましてある。

そのため人間性を多く捧げられた混沌家の末の妹>混沌の娘<は割と元気に生活しているのだった。

「ん〜、これ、本当に美味しいですね。」

ミルドレットさん、味見用の小皿を大皿に取り換えてもいいですか？」

「妹様が我慢しているのに、あんたがつまみ食いしてどうするのよ。もう少し待ちなさい」

料理の味見と称してつまみ食いをするのは、門番隊隊長のミスズである。

彼女の持ち場はこの村へのルートの一つ、『飛竜の谷』経由の入り口なのだが、最近ではミルドレットが専属コックとなったことで村の下層に入り浸っている。

料理目当てに。

「いや、私の部下が最近は頼れるようになってきましたし、私の持ち場はこの巢の中ってことでいいかと思いましてね。

『ルルル、オレ、タイチヨウ ノ タメニ、ウエ デ ハタラク』とか嬉しいこと言って配置転換してくれた奴がいるんですよ。

あ、今のモノマネかなり似ているでしょ？」

「その人随分と変わった口調ね。

何やら門番というよりは門番破りのような……

それに私はその彼には会ったこと無いわよ」

そんな無駄口を叩きながらも高速で作業をこなしていたミルドレ

ツトの料理は完成する。

「すゝべてゝは妹様のたゝめゝにゝ」

材料がクラーグ印の最高の野菜ということもあるが、さすがはミルドレット。

誰にも真似できない達人としての技術を駆使し、野菜の細胞を一つも潰さず、かつミクロの単位で全く同じ大きさに切り揃えられた野菜、刹那の時間すら計算に入れた完璧な火加減と加熱時間、そして音速を超えて動ける手際の良さによって料理は完成した。

「出来ましたよー。」

今日のメニューは『腐れトマト虫』のシチューですよー

思わず『oh! フレッシュ』と言うこと間違いなしです!」

ちなみにこの『腐れトマト虫』というのはその名の通り虫、それもダニだが、クラーグが「トマト」と名が付くのならこれも野菜だ、と無茶苦茶なことを言うので、家の裏手で虫小屋を建ててまで繁殖させていたりする。

リビングにみんなが集まり、「いただきます」と口をそろえてから食事は始まった。

「んゝゝゝ」

ミルドレットー、美味しいよー」

ぺかー、と効果音が響きそうな笑顔の>混沌の娘<。

彼女はミルドレットが来る少し前までは、自身の従者でもあるエ  
ンジーという不死の病に侵された男を哀れに思い、「病気の膿」を  
飲んでしまってから目は見えなくなり、絶え間なく全身を襲う激  
痛に苦しんでいた。

……のだが、それを可哀想に思った姉のクラーグが『病み村』を  
観光地化し、それによって訪れる人間も増え、『大樹のうつろ』と  
いう巨大な木の中を降りて行った奥で手に入る「アイテム無限使用」  
が可能となる被りものを被った勇者たちの献身的な人間性の寄付の  
おかげで以前と変わらぬ明るい少女へと戻っていた。

「それと今日はおまけにポテトサラダも付けちゃいますよ妹様。  
いつも妹様が生んでくださるおかげで卵料理にも事欠かないだ  
なんてここはいい村ですね」

「やったー」

人間性を捧げられたことで痛みとは縁遠い存在となった>混沌の  
娘<だが、それでも蜘蛛としての習性だろうか、毎日のようにぽん  
ぽん卵を産み続けている。

姉であるクラーグでさえ月に一度の周期だというのに>混沌の娘

くは毎日である。

デブ門番隊や赤犬一族、大ヒル部隊など、この地の警備をする混沌の信者である者たちの食事にも提供されている。

一部の人間の『混沌の従者』からは「俺が生ませた卵だ！ ヒヤッハー！」などと叫んで喜びながらマヨラーになっていったそう。

そうした一部の者たちは、天の裁きによつて『アイテム無限使用』が使えなくなつてからも、毎日のように『巨人墓場』に出かけて小さい骸骨を狩りまくつて人間性を稼いできて寄付をするという生活を続けている。

毎日毎日大変そうだが、本人が幸せならば害はないし放置しておいても問題はないだろう。

今日も＞混沌の娘＜宛てに1万個以上の人間性の寄付が寄せられている。

「おかわりー」

「ああもう、妹様食べ過ぎですって」

混沌家専属料理長ミルドレットは食べ過ぎの『混沌の娘』の世話を甲斐甲斐しくこなすことで行方不明の姉のことは記憶の彼方へと忘れ去ってしまったのだった。

今日も『病み村』は平和であつた。

## 第11話：こんとんけ（後書き）

混沌 クラীগ：混沌家二女。とても働き者で村の観光地化に伴う観光客の増大に嬉しい悲鳴の毎日。経理もこなす。

混沌 > 混沌の娘<：混沌家の末の妹。姉弟の中では一番精神的に幼いが年齢で言うなら>爛れ続けるもの<の姉である。だが幼いデモン遺跡に住む弟にお姉さんぶりたいお年頃。

混沌家料理長ミルドレット：行方不明の姉を忘れ、新たな生きがいを得て幸せに暮らしている料理人。>混沌の娘<が毎日ニワトリのように卵を産むものだから卵料理のバリエーションがべらぼうに増えた。

……いや、思うんですよ。蜘蛛の卵もモンハンの飛竜の卵くらいの大きさがありそうだから美味しそうだな、と。

あれだけ沢山の『混沌の従者』（プレイヤー）が毎日毎日人間性を捧げていれば、いずれは>混沌の娘<が飲んだ「病気の膿」とやらも薄まって健康的になるのではないかと。

そしてその結果、病気が治ったあとも、下半身が蜘蛛とはいえ、産卵ってけっこうエロとしても人気のあるジャンルじゃないですか。だから>混沌の娘<の産卵シーン見たさに人間性を捧げている人も中にはいるのではないかと。

いや、私は違いますよ。

私は純粹に盲目でちっばい、色白の彼女が苦しんでいる姿を見て

いらなくて、つつい人間性を捧げまくっただけです。

そんな感じの話でした。 > 混沌の娘<の部屋は、『白くべたつくなにか』のコメントがあれば床一面に書かれているでしょうね。

これ続くかなあ……。

## 第12話：ゲウインドリンの演説（前書き）

下半身が蜘蛛の美女とか普通に出てきますし、下半身が蛇っぽい触手とかでも気にする必要はないと思うんですけどねえ。

まあ、男の触手なんて、ときめかないので女性限定かもしれないかもしれませんが。

そんな訳で今回は『陰の太陽』ゲウインドリンの話です。  
これがやりたかったただだろ、と言われそうな話になりましたが、ええ、これがやりたかっただけです。



## 第12話：ゲウインドリンの演説

「諸君 私はおっぱいが好きだ  
諸君 私はおっぱいが好きだ  
諸君 私はおっぱいが大好きだ

巨乳が好きだ  
貧乳が好きだ  
美乳が好きだ  
着エロが好きだ  
たくし上げが好きだ  
手ブラが好きだ  
マイクロビキニが好きだ  
その時頬が赤く染まっているのが好きだ  
何もかもが大好きだ

平原で 街道で  
塹壕で 草原で  
凍土で 砂漠で  
海上で 空中で  
泥中で 湿原で

この地上で行われる ありとあらゆる場所で見られるおっぱいが  
大好きだ

戦列をならべた男のリビドーの一斉発射が、轟音と共に罪人の理性を打ち砕くのが好きだ  
最初は罪人だった敵が、我が姉の巨大な双丘に理性をばらばらになった時など心がおどる

尻好きの罪人が我が姉の胸に股間をおっ立てているのが好きだ  
攻略メインでやっているのに侵入されて逃げ惑う女性を追いかけるような信念無き罪人を潰すのが好きだ

私たちの固い信念でなぎ倒した時など胸がすくような気持ちだった

足並みをそろえた同士の横隊が 女性の柔肌を許可を得て蹂躪するのが好きだ

恐慌状態の邪教徒<sup>ホモ</sup>が、既に息絶えた敵兵の男の尻を何度も何度も刺突している様など反吐が出る

敗北主義の逃亡罪人を嘲笑う自分たちの気高さなどは、もうたまらない

泣き叫ぶ罪人が私の降り下ろした手の平とともに、  
うねりを上げる『炎の嵐』に、ばたばたと燃やされていくのも最高だ

哀れな抵抗者達が雑多な『火球』や直剣の柄で健気にも立ち上がってきたのを同士諸君の『混沌の大火球』や『白竜の息吹』が木端微塵に粉碎した時など絶頂すら覚える

私たちに殺されるべき罪深き者たちが滅茶苦茶にされるのが好きだ  
必死に守るはずだったホストが蹂躪され、女子供が犯され殺されていく様は我らの存在意義として許してはおけぬ

我らの信念に押し潰されて殲滅される罪人が哀れだから好きだ  
閻霊に追いまわされ、害虫の様に地べたを這い回るのは屈辱の極みだ

諸君、私は閻霊をとの地獄の様な対人戦を望んでいる

諸君、私に付き従う復讐霊諸君  
君達は一体 何を望んでいる？

更なる復讐を望むか？

情け容赦のない、糞の様な闇霊を望むか？

魔術呪術奇跡の限りを尽くし、『火継ぎの祭祀場』の巨大鴉を殺  
す嵐の様な闘争を望むか？」

……ここは『アノール・ロンド』のハンドルをぐるぐる回して降  
りた一番下。

この暗月の霊廟にて、『陰の太陽』グウィンドリンは演説する。

「おっばい！！ おっばい！！ おっばい！！」

彼の信念を理解する信者たちは声を揃えて言う。

「よろしい、ならば復讐だ。

我々は満身の力をこめて今まさに振り下ろさんとする断罪の剣だ。  
だがこの暗い月の存在として堪え続けてきた我々にただの復讐で  
は、もはや足りない！！

大復讐を！！ 一心不乱の大復讐を！！

我らはわずかに一個大隊 千人に満たぬ暗月部隊にすぎない。  
だが諸君は一騎当千の古強者（おっばい信者）だと私は信仰して

いる。

ならば我らは 諸君と私で総兵力100万と1人の軍集団となる。我々を忘却の彼方へと追いやり、罪を逃れようとする連中を叩き起こそう。

罪人の髪の毛をつかんで引きずり降ろし、眼を開かせ思い出させよう。

連中に恐怖の味を思い出させてやる。

連中に我々の鎧のガチャガチャ鳴る音を思い出させてやる。

天と地の狭間には奴らの哲学では思いもよらない事があることを思い出させてやる。

一千人の>おっぱいを守る会くで世界を燃やし尽くしてやる！

『おっぱい大隊 大隊指揮官より全艦隊へ』

闇霊への復讐によって何だかんだで我が姉グウィネヴィアのおっぱいに癒されよう作戦を開始せよ。

征くぞ、諸君」

そんな言葉から『陰の太陽』グウィンドリンによる暗月部隊の新規隊員達への挨拶は始まった。

「我々は偉大なる我が姉、グウィネヴィアと、このアノール・ロンドの地を守るために戦わねばならないのだ！」

皆が一丸となってその信念の元に行動する。

当然スタンディングオベーションが湧き起こり、額に汗を浮かべながらの熱い演説を終えたグウィンドリンの顔にも笑みが浮かんだ。

ここはアノール・ロンドの、なんかハンドルぐるぐるしてやって来れる場所にある『暗月の霊廟』。

普段グウィンドリンが引き籠っている部屋は大王グウィンの墓として神聖な場所なために、信者にも立ち入りを禁止にしているのだが、あのハンドルぐるぐるやって降りてきた篝火のある暗月の霊廟にはそことは別の隠し部屋があり、そこに『暗月部隊』の面々が揃っているのだ。

グウィンドリンの姉『太陽の王女』グウィネヴィアは、全てにおいて大きくてビッグで豊満であるために信者は多い。

それこそグウィネヴィアを守るために暗月部隊に入隊を希望する者が大勢いたため、グウィンドリンは事務仕事の整理のためにアルバイトを雇うほどに忙しい身だった。

すべては、おっぱい教の教えを広めるために！

そう言ったスローガンを持っているので、現在ここに集まっている者たちは皆グウィネヴィアのために命を捨てれる者ばかりである。

中には暗月部隊限定の奇跡を学ぶのに必要な『復讐の証』というアイテムを集めるためと言った連中もいるが、そう言った連中はそもそも今日の幹部会には呼ばれていない。

グウィンドリンの隠し部屋に入室できるのは選ばれた幹部のみである。

今日集まったメンバーは新人が多いが、それでも素質溢れたおっぱい教信者としてこれからの活動を大いに期待されている者たちだ。

「それでは諸君。

今日も私の姉、グウィネヴィアを狙う不屈き者たちの粛清をするのだ！」

「『サー オッパイ サー』」

部隊員達はグウィンドリンの演説が終わると同時にそれぞれに異世界へと罪人の粛清に向かった。

「ふふふ、これで姉上の人気はウナギ登り。  
さすがは私の作った姉上だ」

そう、グウィンドリンは超一級の引き籠りながら、その筋では知らぬ者無きフィギュア制作の王。

何かを作ることに關しては右に出る者のいない王の中の王なのだ。

グウィンドリンの父が『薪の王』と呼ばれているように、本来なら息子である彼が王位を継いでもおかしくはないのだろうが、彼にはそんな面倒くさい王になどなりたいとは思えなかった。

何故なら彼は<sup>アーティスト</sup>芸術家だからだ。

巨大な肉の塊に柔らかな質感と生命によって、バランスの取れた重量感を与える肉体作りのプロフェッショナル。

実は王女の間にいるグウイネヴィアの姿はグウインドリンが作りだした幻影であり、それを知る者などほとんどいない。

造型師としてこれ位のものは簡単に作れるのだ。

さらに暗月部隊では、罪人を殺しまくって昇格すれば、グウイネヴィアの8/1フィギュアがプレゼントされるという特典も付いてくる。

これは燃えないはずがない！ いや、萌えないはずがない！！

グウインドリンは言葉巧みに信者を増やし、暗月部隊はかなり大規模な軍勢になっている。

その中には名の知れた凄腕の騎士までも属している。

もはや組織は武力として、これ以上ないくらいに進化しているのだ。

例えば幹部信者の一人、PN<sup>ペンネーム</sup>『金ユルト』さんからは、

「グウイネヴィア様のおっぱいに全てを捧げようと『火継ぎの祭祀場』のかぼたんの魂とってきました」  
とのコメントがグウインドリンの元に届いている。

別の信者、PN<sup>ペンネーム</sup>『太陽万歳！』さんは、

「彼女こそ俺の太陽だ！」

と言つて遠眼鏡によつて毎日のように眺めているそつだ。

今日も暗月部隊の信者はグウィネヴィアに近づく闇霊、それに過去に罪を犯した罪人を殺すために異世界を渡り歩く。

ちなみにこの世界ではグウィンドリンは姉に対して過保護なため、暗月部隊から昇格した一流の紳士のみがグウィネヴィアの面前に立つことしか許可していない。

この世界は太陽のような明るさで照らされ続けていくのだらう。



## 第12話：グウィンドリンの演説（後書き）

グウィンドリンって引き籠りじゃね？ てな考えから書かれた話でした。

私のメインで遊んでいるキャラはレベル99なのですが、復讐霊としては何度やってもいつやっても侵入できない……。

デモンズソウルではレベル120が特に多いレベル帯でしたし100近くなら大丈夫だろうと思って折角頑張ったのになかなか他の人と遊べないし侵入されない。

そういえば『デモンズソウル』の黒衣のかぼたんは「火」ではなく「灯」を守っている設定でしたね。

かぼたんが守っているのはその手に持つ杖の灯り。

すなわち移動式の篝火ということになりますので、実は『ダークソウル』でもプレイヤーを探してあちこちを徘徊しているに違いない！

うおー！ いま見つけてあげるぞかぼたん！！！！

### 第13話：太陽と罪（前書き）

今回は活動報告でたぶん初めてだろう次回予告というのをしたり、『太陽の騎士』ソラールと、『女神の騎士』ロートレクのお話ですね。

前回の話で二人は少しだけ出ていましたが今回はメインとなって登場の巻。

### 第13話：太陽と罪

よう、はじめましての人には、はじめまして。

私の名前はロートレク。『女神の騎士』と呼ばれている。

この呪われた地、ロードランに来る前は『罪の女神』ベルカ様に仕えていたのだが、この地に来てから私の考えは変わった……。

もっと素晴らしい女神に出会ったのだ！

「よくぞ来ました不死の「おっぱい様ああ」……貴方はいつも変わりませんねロートレク」

「私の仕事は貴方のその豊かなお胸を拝見することにこそあるのです（キリッ）」

場所は『アノール・ロンド』の王女の間。

そこに居られるこのお方こそ、男のロマンの塊、『おっぱい女神』グウィネヴィア様だ！

「私はそんな恥ずかしい二つ名は名乗っていません！  
ロートレク、不死の勇者としていい加減に父から火を継いできてください！」

「だが断る。なぜなら私の使命はグウィネヴィア様の豊かな双丘にもみくちやにされることにあると見つけたり。

故に、そのような些事に関わっている暇などありません」

ちなみに私は漢なので正面から堂々とグウィネヴィア様にアタックをかける。

私と同じく暗月部隊に所属する幹部に、『太陽の騎士』ソラールという男がいるが、「この方こそ俺の太陽だ！」とかなんとか言つて、正面からアタックするのではなく、盗撮に命を懸けている変態だ。

今も柱の影から『遠眼鏡』で覗いているのが丸分かりだ、バカ者め。

なあゝにが、

「俺が太陽のような男になりたくとも無理だったのは、グウィネヴィア様が太陽だったからだ」だ。

しかもそれを理由に自身は太陽と対になる月のような男を目指そうとし、行き着いた月らしい行いとして、太陽を陰からこそこそと覗きをするような奴は、断じて同じグウィネヴィア様に忠誠を誓った暗月部隊の仲間として認めぬ。

そんな事を考えながらグウィネヴィア様の真正面から遠眼鏡で巨大なものを覗いていたのだが、懐かしい声に邪魔をされる。

できれば会いたくない人物なのだが。

「こりゃ、ロートレク！」

何故そんな女にときめいておる！？

お主の仕えるべき無二の主はわっちじゃろうが！」

「なんか用すか、おちびさん？」

私はすでに貴女を信仰なんてしていませんよ」

「むきー！！！」

このなれなれしく話しかけてくるガキ臭い少女の名前は『罪の女神』ベルカ。

その容姿は黒髪ぺったんな幼女なのだが、実際には何百年と生きていた真正正銘の神様だ。

「わっちへのこれまでの愛の言葉は嘘じゃったのか！？」

もうわっちのこの小さな体躯にはときめいてくれんのかや！？」

「確かに昔の私は貴女にときめいていたのは事実だ……が、スマン、ありや嘘だった。

所詮チビはチビ。大は小を兼ねると言いますし貴女のようなちっさい幼女はすでに興味ありませんので」

大体何百年も生きて全然成長しないだなんて面白くないだろう？

確かにその黒髪ロングは美しいとは思いつし、顔の造形も整っている部類だ。

だがそれでも、目の前にいる圧倒的なまでの大きさを誇る太陽のごとき「本物」の女神様には敵わない。

「わっちも女神じゃ！

本物の女神なんじゃ！！」

「チツ、心の声を読むなよ、ぺったん子が。

私はすでに『（ベルカ）女神の騎士』ではなく『（おっぱい）女神の騎士』を名乗っているのですから私のことは忘れて新しい信者でも増やしたらどうですか？

まあ、このアノール・ロンドの地では太陽信仰が盛んですので、まず無理でしょうけど」

どこぞの世界では、私によく似たウサギと呼ばれる暗殺者がロリコンであるという話があるそうだが、私は違っぞ。

「不死の勇者ロートレク！

だから私はそんな恥ずかしい呼び名は嫌だと言っているじゃないですか！……！」

こちらもう少しうるさい我が主のグウィネヴィア様。

だが、そういうところも可愛らしかったりするから好きだ！

「いえ、グウィネヴィア様はご自分の魅力を分かっておりません。この地の誰に聞いても『太陽』を『おっぱい』と読みますよ。あなたは、まごうこと無き『太陽の王女』<sup>おっぱい</sup>なのです！」

私の信念は変わらない。

大体自分の髪の毛をタリスマンとして信者に配るって、どんだけ信仰を増やしたいんだよっ！？

『ベルカのタリスマン』は私も最初こそ持っていたものの、気持ち悪いからさっさと捨てちゃったし。

「うう~~~~」

今にも泣きだしそうな顔の『罪の女神』ベルカ様。

だが、そんな顔しても私には効果はない。

しかしながら、そういう黒髪ロングで廓言葉<sup>くわわ</sup>の少女にときめく変態という名の紳士はいたのだった。

「ベルカ様！　どうか俺を犬と呼んでください！！！」

先ほどから私たちのコントを覗き見ていた『太陽の騎士』ソラールだ。

その姿は普段ならば自分で描いた太陽の絵が描かれた鎧を身に纏っているはずのだが、今は兜のみを被った裸であった。

「私は貴女のような女神を探しておりました！

太陽信仰はもう古い！

今こそ罪<sup>ちいばい</sup>信仰こそが大切なのです！」

「えっと、お前は誰じゃ？」

戸惑いながらも新たな信者候補の出現に嬉しそうなベルカ様。

おいおい、まさかそんな変態を私の代わりに信者にするつもりか？

「申し遅れました。

俺は『太陽の騎士』を名乗っていたソラールと申します。

ですが貴女に出会ったことでこれからは『罪の騎士』ソラールと名乗りたいのですがよろしいでしょうか？」



見れば柱の陰には無残にもズタズタに引き裂かれたソラールの鎧。

もしかして金属で出来た鎧を格闘家の試合前のパフォーマンスよろしく、破り捨てたというのか？

本当に肉体的に鍛えている騎士だな。

「うむ、よからう。

わっちの名前は『罪の女神』ベルカじゃ。  
好きに信仰するが良い」

得意げな顔でこちらを見るベルカ様。

まあ、俺を諦めてくれるならそれでいいんですけどね。  
本当にそんなのでいいのなら。

「お、そうだロートレク。

折角だから貴公に渡したいものがあるんだ」

「渡したいもの？  
なんだそれは？」

ソラールは腰に提げた『底なしの木箱』をあさると、そこから出てきたのは『暗月部隊』の中でも大幹部のみがもらえるという伝説

のレアアイテム、『8 / 1サイズのグウィネヴィア様人形』だった。

……でかいな。

「ちょ、貴公<sup>きき</sup>つ、何でそんなレアアイテム持ってたよ!？」

「ふふふ、実は『陰の太陽』グウィンドリン様にこのロードラン各地の美女の写真をプレゼントしたら貰えたのだよ。

普通は幹部に昇格するには『復讐の証』というアイテムを大量に揃える必要があるそうだが、何事にも抜け道はあるものだな。

斬り落とした罪人の耳よりも喜んでくれたぞ」

言葉がない……。

まさかそんな裏ワザで陰から覗きをするしか能のないアホが大幹部の地位を得ていただなんて。

「それでは行きましょうベルカ様。

この地は不浄なる『太陽<sup>おひ</sup>』信仰の地。

我らの教義を理解する仲間を求めて旅に出るべきです」

「そうじゃな、わっちの魅力を伝えていくためにはここは、ちと場所が悪い」

そう言つて裸のまま傳くソラールを引き連れてグウィネヴィア様の前から立ち去るベルカ様。

今でこそ太陽信仰おっはいいいとは言え、かつては大いにお世話になつた女神様だ。

その信者となつたソラールに私も何かやるべきだろう。

「ソラール！」

「？」

私はグウィネヴィア様に捧げる予定だつた『火防女の魂』をソラールに投げ渡す。

グウィネヴィア様には「気持ちが悪い」と言われて拒否られたからでもあるが。

「餞別だ。かつての同志よ。

いつかまた互いの夢を語り合える日がくるまでのしばしの別れ。元気でやれよ」

「ふつ、粹な真似をするじゃないかロートレク。安心しろ。かつての貴公の主は俺が信仰する」

こうして私とソラールは別れた。

何だかんだと言いながらも同じ太陽を信仰する者同士だったのだ。

別れはさみしいものだ。

しかし、かつての私の主が側にいるのなら大丈夫だろう。

ベルカ様……私の数少ない友をよろしく願います。

---

その後、アノール・ロンドの地は太陽信仰の聖地。

不死教会は罪信仰の聖地となった。

互いに理解出来ないものを信仰する者同士だが、争うことはないだろう。

なぜならお互いの信者たちは己の守るべきものに、それぞれ誇りを持っているのだから。

太陽ちやうぱいを守る騎士あつぱいロートレク。  
罪ちやうばいを守る騎士ソラール。

道は違えど、それぞれの信念に則って別れた二人の騎士は後悔などない清々しい気持ちを胸にそれぞれの信仰心を磨いていくのだった。

大も小も、どちらも素晴らしいものに違いはないのだから。

### 第13話：太陽と罪（後書き）

ソラールが最初、グウィネヴィアを信仰していたのは幹部限定の特典である『8/1サイズのグウィネヴィア人形』が欲しかったというだけの理由。

それも手に入れてしまうとでかすぎて邪魔なのでロートレクにあげたのでした。

なんだか『罪の女神』ベルカがずいぶんなキャラになってしまいましたがおそらくこんな感じの人なのだと思います（断言）！

ただまあ、私個々人の意見を言いますと、巨乳が悪いとは言いませんしロリも否定しません。

ですが背が高くて成長がすでに止まっているのが目に見えて分かるのに、胸だけが小さい女性こそ素晴らしいと思いませんか！？

貧乳好きと言うとロリ扱いされやすいですが、私は声を大にして言いたい！

ちっぱい〃ロリじゃねえ！

手足がスラリと伸びて、カッコいい女性に胸だけがないというのが可愛いんじゃないか！

私はカッコイイものは好きですし、美しいものも好きですし、可愛いものも大好きです！

その全てを兼ね備えた大人のちっぱい女性は素晴らしいとここに宣言します！

そんな感じのお話でした。　そういやロードランにいる人は「全て不死の呪いにかかっているんじゃないかな？」

殺して死なない人はほとんど居ませんけど。

殺せないのは古龍と猫のアルヴィナだけかな？

## 第14話：アノール・ロンド小学校（前書き）

今回の話はこれまでの話とは全く関係ありません。

それ＋ダークソウルの原作ともほとんど関係ありません。

原作の名を語る別の何かです。

どうしてもギャグが書きたくなったので勢いで書きました。



## 第14話：アノール・ロンド小学校

変わることはない天候に恵まれたこの地にそれはあった。

子どもたちの学び舎、『アノール・ロンド小学校』が。

「それでは皆さん、明日も元気に登校してくださいねー」

「「「はい、先生さーならー」」」

「はい、さようなら」

その教師、『太陽の王女』グウィネヴィア先生は笑顔で生徒たちを見送る。

「ふう、これにて今日の授業も終了。

明日はいよいよ私が教師になって初めての授業参観の日ですね。  
気合い入れないと！」

そう、このアノール・ロンド小学校は明日、授業参観の日なのだ。

個性豊かな生徒たち……それに生徒以上に個性豊かすぎる親御さんたちが来るので新任教師のグウイネヴィアは気合いを入れる。

そもそも彼女が教師となったのはこのアノール・ロンドの地が暇すぎるということにあった。

父グウィンが古竜を倒して数年、各地は平和になっていたが退屈でもあった。

そこでグウイネヴィアの弟、『陰の太陽』グウインドリンの提案により女教師として小学校を始めることになったのだ。

何故かサイズがぴったりのオーダーメイド品のような気心地のいいスーツを弟が持ってきた時は驚いたがグウインドリンがそういう服飾の技術もあることをしていたので特に気にしなかった。

強いて言うならば下着が赤色というのが気になるが。

「私は『太陽の王女』だから純白の下着の方がイメージに合う気もするんですがね……」

だが弟にとっては赤こそが姉グウイネヴィアの色だったのだろう。もしくは彼女のファンクラブの声を取り入れたのか……。

しかしグウイネヴィアはあまり弟の作ってくれた下着を気に入ってはいなかった。で基本的に下着はつけていなかったりする。

それが彼女のファンクラブや弟を喜ばせることになっていたとし

ても気にするグウィネヴィアではなかった。

「それはさておき、明日の授業参観、親御さんたちはきちんと正門から入ってくればいいんですけどね」

グウィネヴィアのこの発言、実は以前小学校を始めるまえの学校見学を始めた時、正門からではなく、裏口から侵入しようという連中が多数いたのだ。

連中が裏口侵入してきたのは、教師をすることになったグウィネヴィアの私物を漁ることだったのだが、一人も逃さず暗月警察に捕えられてしまったりもした。

その時の騒動でアノール・ロンドのあちこちの窓ガラスが割られてしまったりもしたのだ。

大斧や特大剣、さらには『混沌の炎の嵐』や『墓王の大剣舞』ですら割れない丈夫な窓ガラスを割れると言えば、侵入者たちの力量が分かると思うものだろう。

アノール・ロンドの窓ガラスに割れたところがあるのはそういういきさつもある。

まあ、それはともかく、生徒を募集すると来るわ来るわ。希望者が多数いたのだ。

そのため学校を開いてからはグウィネヴィアも暇つぶしが出来る

わ、ずっと寝っ転がってばかりいなくて済むはで充実した日々を送れていた。

「姉上~~~~!!!!」

明日の授業参観には暗月警備部隊50人で教室の周りを囲みますので、どうぞご安心ください!」

「グウィンドリンったらそんなに警備をしていたら子どもたちが驚いちゃうじゃない。

少し警備は減らしてよね」

何かと構ってくる弟を鬱陶しいと思いながらも強くは言えないグウィネヴィア。

何だかんだで、たった一人の弟が可愛いからか、そのためにグウィンドリンは段々とエスカレートしていくのだった。

そして次の日。

「うわーん!」

「あー、>心折れたバーニス騎士くくんがレアちゃんを殴った〜  
〜!!!」

「むーん」

「むーん！」

「せんせー、>心折れたバーニス騎士くくんが『ソルロンド』のニコくんのフリして言い逃れしようとしてまーす」

早速生徒達が暴走し始めていた。

「コラコラみんな」。

仲良くしなきゃ駄目でしょー」

それで言うことを聞くなれば教師は苦労しないというものだ。

「おい>心折れたバーニス騎士く！」

てめえ何レアちゃんを泣かせてんだよ!!!」

そう言って>心折れたバーニス騎士くを締め上げるのはガキ大将のタルカス君。

スポーツ万能なうえに、家が駄菓子屋さんのためにクラスでも人氣者である

「なんだよタルカス。

お前ひょっとしてレアちゃんに気があるのか？」

「ばつ、馬鹿！ そんなんじゃねえし！」

「赤くなつて怪しいぞタルカス。

いい加減認めちまいな」

「問題の争点を変えるな>心折れたバーニス騎士く！

そんな事言うならお前のあだ名をこれから>黒ニートくにするぞ  
！」

その一言に教室の端の方で仲間になりたそうな目で見ていた>青  
ニート二世くくんが反応した。

>青ニート二世くくんは引っ込み思案で友達がいなかったのであつた。  
ハハハハハ……。

「もー、みんなが先生の話聞いてくれないなら先生はこの学校を辞  
めますよ！」

アノール・ロンドも立ち入り禁止区域にしますよ……！」

「やれるもんならやってみろよ先生。

俺は、レアに、謝らない！」

何故か無駄に偉そうな>黒ニートくん。

何気にグウィネヴィアもこの呼び方が気に入っている。

「歯あ食いしばれ>黒ニートおおく！」

今から俺が宇宙の果てまでぶっ飛ばしてやる」

「それならば俺はタルカス、君をアイアンゴーレムのように掴んで  
放り投げてやるう。

バーニス騎士団副団長補佐直属の部下のパシリである俺を舐める  
なよ！」

そうして始まった>心折れたバーニス騎士くんとタルカス君の  
喧嘩は激しさを増し、教室の他の子たちはその喧嘩に賭けをしだす  
始末。

せっかくグウィネヴィアが教師という天職を見つけたと言ったのに  
生とがこれではどうしようもない。

そんな中、グウィネヴィアに近づく一人の保護者がいた。

「まあまあ、先生。お茶でも飲んでリラックスしてください」

「あら、ありがとうございます。」

「……えーと」

「ああ、申し遅れました。」

私はこちらでお世話になっている『半竜』プリシラの父、『白竜』シースと申します」

「プリシラちゃんのお父さんでしたか。」

プリシラちゃんはとてもいい子で、学級委員をしてもらっているので、いつも助かっております」

「いやなになに。」

私も娘から先生の話を聞いて今日の授業参観を楽しみにしていたのですよ。

どうです？ このまま授業を放り出してお茶でも？」

「え、ええーっと……」

正直少し悩むグウィネヴィア。

授業はすでに誰も聞いてくれておらず、生徒もみんな不死である



ために、タルカス君と心折れたバーニス騎士くんはお互いの剣で首を刎ね、殴り蹴り、血みどろの戦いをしていた。

「分かりました。」

確かに授業の体裁なんてもうどうにもなりませんし、私も体を持て余した一人の女。

シースさんの御誘いを受けようと思います」

とまあ、それでノクターンノベルに行く話となってもいいのだが（何気に体の大きさに相性が良さそうだし）、そうは問屋が卸さない。

「……パパ」

低く底冷えするような冷気を纏った声が響く。

「先生に何馬鹿なこと言ってるんですか？」

「あ、いやあ、その……」

死神の鎌とでも言えば分かり易いだろうか。

プリシラは明らかに命を刈り取るための獲物を手にしている。

鎌の方もどこかしら血を吸いたがっているようにも見えるのは目の前の少女が発する威圧感からだろうか。

「プリシラちゃん。

先生がママになるのは嫌なのかな？」

ここでこのセリフはどうかと思うだろうが、グウィネヴィアは男に飢えているのだ。

自分と体のサイズがちょうどいい男がほとんどいないというのもあるが、シースの今の格好がビシツと決めたスーツ姿というのに惹かれたからでもある。

「プ、プリシラ……、パパはな、今日は『トカゲの一郎』をイメージしたハードボイルドな男をテーマにしているんだ。  
だからこのナンパは黙って見過ごしてくれないか？」

さすがはシース！

この状況でまだグウィネヴィアを口説く勇気があった！

「パパ……パパは私だけを見ていればいいのよ。

ママなんていなくてもいいの。

私にはパパだけでいいんだから。

それなのにパパは先生とイチャつくの？



こいつ……狂ってやがる。

グウィネヴィアはそう思いながらもっプリシラの本気を目の当たりにして止めることが出来なかった。

「トドメだ>心折れたバーニス騎士く！

因果の交差路でまた会おう！」

「タ、タルカス……、俺を倒しても第二、第三のニートが現れるぞ……」

こちらはこちらで勝負が着いたようだ。

グウィネヴィアが見ると教室は荒れ果て、生徒の何人かが全身から血を噴き出して倒れていたりもしたが気にするほどでもないだろう。

そうしてタルカスくんは>黒ニートくにトドメを刺した。

「どうやら賭けは私の勝ちみたいね。

こんな騒がしい学校も悪くないと思う自分に対してお祝いでもしましょうかしら？」

レアちゃんに感謝されて照れるタルカス君。

そんな二人を見ながらも、タルカスくんと心折れたバーニス騎士くんの喧嘩の賭けで、大儲けしたグウィネヴィアは晩御飯は弟とどこかに食べに出かけようと思うのであった。

ちなみに、アノール・ロンド小学校は次の日から廃校となり、それ以後グウィネヴィアはずっと引き籠もり生活をするのだった。

## 第14話：アノール・ロンド小学校（後書き）

8作目が最終話まで書きあがっていないのに、こんな話を描いているのは余裕からだろうか？

いや、違うな。これは油断というものだ。

そんな感じな話でした

シフの話は長ったらしいのでまだ執筆途中です。

それに8作目の方は明日投稿予定の話までしか完成していないので明後日までに何とか書きあげないとえらいこっちゃですよw

それとプリシラはこんな本編に関係ない話で登場を終わらせるつもりはありませんので、まだ登場予定はありますよ

ただ少し病んでいるプリシラというのもアリかと思ったので、プリシラメインの話で予定しているキャラとは違う感じに書いてみたかったのですよ。

次話は未定。8作目を終わらせてからになるかもしれません。

第15話：『深淵歩き』と『王の刃』（前書き）

今回はアルトリウスとキアランの話ですね。

一応次話に続きますので二話同時更新となります。

軽さと重さの両方を求めた結果、バランスが悪い気もしますが、これはこれでいいかな？ と思いますのでそのまま投稿。

バランス良く書ければいいのですが、如何せんこれが今の私の実力ということ。

いつかはプロ並みのアマになる！！

## 第15話：『深淵歩き』と『王の刃』

「思わねば花なり、思えば花ならざりき……か」

「アルトリウス、何だいそれは？」

「いや、私の騎士としての在り方を実に表している言葉だと思っ  
ね」

「あんたはまったく……」。

確かその言葉を言った男は、そいつの友人が死んだときに『お前  
が代わりに死ねばいいのに！』と呪詛の言葉を投げつけられた優柔  
不断な二股男じゃなかったかい？」

「わふわふ！」

「いいじゃないか。

言葉の美しさは誰が使うかで決まるのだよ。

私が騎士として、誇りを持って使う分には問題ないだろう」

「ここは『黒い森の庭』と呼ばれる大王グウィンに仕える四騎士、  
「深淵歩き」アルトリウスが所有する土地。



その場所に騎士アルトリウスはいた。  
自身の剣を眺めながら友との会話を楽しむように。

彼の隣にいるのは友である『白猫』アルヴィナ、それに『大狼』シフである。

アルヴィナはそのまるまるとした体をさらに丸めるようにしてアルトリウスの側に座り込み、見上げるほどの巨体を持つシフも、自身の友であり主でもあるアルトリウスの側を決して離れようとしな

い。  
三人……いや、一人と二匹は友であり、暇さえあれば集まってるんびりしている。

ただ時間が流れていくという、何もない時間を楽しむというのを何よりも好むのだ。

「それよりも二人には言っておきたいことがある。  
私はこれから四騎士の一人として、グウィン王の密命によって出  
かけなければならない。」

当分の間、帰ってこれないかもしれないな」

「何やら突然だねえ、アルトリウス。」

古龍達との戦が終わったばかりじゃないかい。

またぞろグウィンの奴に面倒事でも押し付けられたのかい？」

「ハハハ、アルヴィナは本当にグウィン様が嫌いなんだな。」

だが私は騎士として、あの方こそ無二の主だと思っているよ」

「しかしまあ、大変だねえ」。

それにしてもあんだ、キアランのお嬢ちゃんはいいいのかい？

あの子はあんに気があるようだったけどさ」

キアランというのは、アルトリウスと同じくグウィン王に忠誠を捧げた四騎士のひとり、「王の刃」キアランのことだ。

アルトリウスに憧れてグウィン王の騎士団に入団し、その類稀な暗殺者としての素質を買われて「パリイ100%」のキアラン、「尻取り」のキアランなどとも呼ばれている。

「誰が尻取りだ誰がー！？

わたしが狙っているのはアルトリウスの尻だけだー！」

「おいおい、突然現れるなよキアラン」

やはり突然の流れだが登場の仕方は流石と言つべきか、「王の刃」キアランである。

アルトリウスあるところキアランの姿あり、と騎士団の中でも有名である。

「まあ、聞いていたのなら話は早い。

私はこれからグウィン王に呼ばれているから出かけてるぞ」

「ちよっ、アルトリウス！

わたしグウィン様からそんなこと一言も聞いてないんだけど!？」

「それはこれが、私への任務だからだろう。

それに四騎士の中ではお前が一番若い（幼い）。

グウィン様の勅命が何なのかは分らんが、四騎士に任せるくらの任務なのだ。

ならば私が出るのが妥当であろう」

頬を膨らませて悔しがる子供っぽいキアラン。

それをニヤニヤと笑みを浮かべながら眺めるアルヴィナとシフ。

いつもの光景なのだがこれが最後となるのをまだ誰も知らない。

「四騎士筆頭『竜狩り』オースタイン殿は他の騎士たちと共にグウィネヴィア様の守護のためにアノール・ロンドを離れられないし。

『鷹の目』ゴード殿はどこぞにふらりと出掛けている。

お前はグウィン様の『王の刃』として、傍を離れるわけにはいくまい。

というか、ここにきて大丈夫なのか？」

「心配ご無用よ！」

影武者を用意してあるから私はいつでもアルトリウスの側にいていいんだから」

「影武者では実力的に護衛としては物足りないだろう。」

まあ、いいさ。私が出掛けている間アルヴィナとシフの面倒を頼むぞ」

「ちよいとアルトリウス！」

あたしらは犬猫じゃあるまいし自分の面倒くらい自分で見れるさ！」

「わふわふ！」

アルトリウスの発言に激昂するアルヴィナとシフ。

いや、そうはいつでもこの二匹は狼と猫なのだが。

「それじゃ私は行ってくる。」

確かに長くはなりそうだが、これはもしもの時を想定しているだけで死ぬつもりはないさ。

キアランも、グウィン様をちゃんと守っているよ。

話の続きはまた今度だ」

「あー、待ちなさいよアルトリウス！  
話はまだ終わってなんかいないんだからー！！」

こうしてアルトリウスはグウィン王の勅命により旅に出ていった。

三人はアルトリウスがいないのならばとすぐに解散してそれぞれの巣に、家に戻っていく。

---

「…………グウィン様がわたしを呼んでいる？  
一体なんなのよあの髭オヤジ」

『最初の火の炉』にてグウィン王の側近として付近の警備任務をこなしていたキアランに王からお呼びがあった。

「まさかこの前アノール・ロンドへ行った時、窓ガラスを割っちゃったのがバレたのかしら？

誰も付近にはいなかったのに…………まさかオースタインが盗撮しててそれをバラしたの！？

あのエロチビめえええー！！」

一人で何やら口走っているが、それを伝えにきた部下は彼女の不敬も普段からのことなので告げ口したりはしない。

キアランの心はアルトリウスのみに向いているので仕方がないだろう。

尤も、グウィン王よりも四騎士であるアルトリウスを尊敬する騎士は大勢いるのでキアランばかりがグウィン王に不敬と言う訳ではないのだが。

それはともかくグウィン王の元へ向かったキアランであった。

「グウィン様、何か私にようでもあるんですか？」

私これでもアルトリウスが帰ってくるのを待つのに忙しいんですけど」

「……相変わらずだなキアラン。

そんなにまでアルトリウスのが好きなのか？」

「はあ？ そんなの当たり前じゃないですか。

グウィン様は髭オヤジ。アルトリウスはイケメンで最強無双の大剣使いの騎士。

どっちが上かだなんて決まっていますよ。

一応四騎士の一人として、アルトリウスがいない今はグウィン様を最優先していますけどね」

「……まあいい、お前に任務を言い渡そう。

「久方ぶりだが腕の方は大丈夫か？」

キアランの発言に何か考えるような素振りを見せたものの、特に何を言うでもなく仕事の話を始めるグウィン王。

いつもならもう少しキアランを窘めることを言ってから本題に入るので、キアランは珍しく思いながらも王の言葉に耳を傾ける。

「お前にはこれより『小ロンド遺跡』に向かつてもらう。  
そこに今回の暗殺対象がいるのだ」

「別に仕事ですし誰を殺すのも構いませんけど、『小ロンド遺跡』  
なんかまでわざわざ殺しに行くだなんて一体何したんです？ その  
暗殺対象者は」

「……アルトリウスが旅に出る時、奴は自身の持つ二本の剣の内一  
本を持っていった。」

そのもう一本の剣が盗まれたのだ。

その盗んだ者が『小ロンド遺跡』に向かっているのだ」

これにはキアランもさすがに驚いた。

無双の騎士としても有名なアルトリウスの剣を盗みだすような輩  
がいたこともそうだが、何よりもグウィン王がアルトリウスのため  
にキアランを差し向けるといふのに驚いたのだ。

「分かりました。  
アルトリウスの剣を盗むような不届き者は私が始末して見せましよう」

キアランは惚れた男の、騎士の誇りである剣を盗んだ賊に対して怒りではらわたが煮えくりかえる思いだが、そこは暗殺者として感情を見せない。

冷たく暗く、感情を心の奥底へ静めていく。

そうして『小ロンド遺跡』へと向かったキアランであつたが、ここからの出来事は二人の会話無しに結論までを完結に説明することにしよう。

『小ロンド遺跡』へと向かったキアランはアルトリウスの剣を盗んだ者に出会った。

そして気配を消して背後から忍び寄り、その喉に剣を突き立てる。

それだけで仕事は終わるのだが、今回は剣の回収もある。

そのため殺した相手の顔を見たわけなのだが、その殺した男はキアランの最も愛する男、『深淵歩き』アルトリウス本人であった。

あまりの事態に呆然としてしまったが、すでにアルトリウスは死んでいる。

蘇生活動も無意味。



ここにきてようやくキアランはグウィン王の真意に気づいた。

彼の王は四騎士としての功績が大きく、自分よりも慕われるアルトリウスを妬んでいた。

そしてアルトリウスに『小ロンド遺跡』最奥にある『深淵』にて封印されている四人の公王を完全に始末するという任務を与えたのだ。

かつて封印するしかなかった公王たちを完全に殺しうるのは『深淵歩き』アルトリウスだけであるとそそのかして。

そしてそれを追ったキアランに始末させた。  
ただそれだけの話だ。

愛する男を自らの手で殺してしまったキアランは狂い、怒り、グウィン王に牙をむいた。

だが真実は闇に葬られ、キアランは殺されることとなる。

アルトリウスもキアランも死んでしまった。

グウィン王のつまらない嫉妬によって……。

第15話：『深淵歩き』と『王の刃』（後書き）

グウィン王は見た目がなんか悪役っぽい気がします。

剣のデザインがシンプルでエクスカリバーみたいとかも言われていますが、それでも悪い人に違いない！

シフは次話ですけど、会話が出来ない犬を出したところで出番が増やせないんですよ……。『銀魂』の定春みたいな。

以下、魂の絶叫。

『マクロスF』の主人公に相應しいキャラにはミシエルとかオズマとかジエフリーとか、そんな素晴らしいキャラがいるのになんでアルトなんだよ！？

なんでミシエルが死ぬんだああー！！！！！！！！

## 第16話：墓を守る者たち（前書き）

ロートレクに脳筋アンバサ戦士（二周目）で挑んだらえらい苦戦しました。

盾構えてもかなり貫通ダメージ大きいですしショーテルは馬鹿に出来ませんね。

それと新セーブでかなり可愛い女性キャラが出来たのでプレイ中。魔術師でやっていますが今回は刺剣プレイでいきます。

亡者兵士の鎧とバルデルの足甲最高

## 第16話：墓を守る者たち

アルトリウスが旅に出てしばらくしたある日、グウィン王が騎士団を率いて『黒い森の庭』に訪れた。

アルヴィナとシフは、どうせつまらないことだろうと思いつつアルトリウスの友として無礼のないよう、対応しようと出てきたのだが、二人に向けてグウィン王が放った言葉は二人を驚かせるものだった。

「『白猫』アルヴィナ、それに『大狼』シフ。

お前たちの友にして我が四騎士の一人、『深淵歩き』アルトリウスは死んだ」

それだけ告げるとグウィン王は他に何も告げずに森の奥へと入り、騎士たちに石材を運ばせて巨大な墓を建てた。

アルヴィナとシフも何かの間違いだと思いたかったが、グウィン王の傍に付き従う二人とも顔なじみの騎士ですらアルトリウスは死んだと語られたのだ。

だが二人は信じなかった。

二人とも友の帰りを待ち続けたのだ。  
誰も戻らぬこの森で。

アルトリウスが死ぬはずないと信じて。

だがそれから数日しても友は帰ってこない。

そんな時、森に侵入者があった。

その侵入者がアルトリウスではないことに気づいてはいたが、アルトリウスの土地を荒らすような輩ならば返り討ちにしてやろうという考えからこの地の番をする『大狼』シフと『白猫』アルヴィナは出向いたのだ。

だがその侵入者は二人のよく知る人物であった。

「あんた……キアランじゃないのさ！  
いったいどうしたってんだ、そんなボロボロになっちまって!？」

やってきたのは『王の刃』キアラン。それに彼女に付き従う直属の騎士たちであった。

しかしその誰も見ることからに弱り切っており、今にも死にそうな重体であった。

「くうん……」

シフが癒すようにその傷を舐めるがその傷は深い。

せめてもの救いは傷口が火で焼かれてあることだろう、出血は止まっていたことくらいだ。

「ごめんね……わたし、アルトリウスを殺しちゃったんだ……」

突然の告白に思考が止まるシフとアルヴィナ。

キアランは語る。

グウィン王の策略とつまらない嫉妬心を。

そしてその復讐に挑んで返り討ちにあったことを。

自分に付き従ってくれた仲間の騎士たちも守り切れなかったことを。

キアランの伝えた真実により、グウィン王の騎士団は大勢がキアランに付いた。

このような事態を防ぐために、グウィン王はアルトリウスを始末させたキアランも『小ロンド遺跡』にて始末する手はずだったのだが、生憎キアランに差し向けられた刺客たちは皆返り討ちにあってしまった。

それほどまでに王の四騎士とは拔きん出ているのだ。

四騎士で一番若いキアランとて、そこらの凡庸な騎士や暗殺者に負けるほど弱くはない。

これにより邪魔なアルトリウスは始末出来ても、それと同じくらい始末しておきたかったキアランとその部下たち、それにアルトリウスを慕っていた者たちは反旗を翻してグウィン王の元へと攻め込んだ。

残りの四騎士　アノール・ロンドにて『太陽の王女』グウィネヴィアの警備にあたっているオースタインも、どこぞにふらりと旅に出た『鷹の目』ゴーもグウィン王の側にいない。

だから王はキアラン達を撃退すると、僅かばかりの自らの騎士に『最初の火の炉』を警備させ、その入口を完全に閉ざしてしまった。

すでにグウィン王の手によって半死半生のキアランたちは、それでもアルトリウスの死の真実を伝えるために『黒き森の庭』を目指したのだ。

「ははっ、グウィン王め、随分と立派なアルトリウスの墓を立てるじゃないの……」

グウィン王が建てたアルトリウスの墓を見てキアランは言う。

こんなことで自身の罪が許されるとでも思っているのか！　という怒りを込めて。

「ごめんアルヴィナ。ごめんシフ。

私はアルトリウスを殺してしまった。

そしてグウィン王に負け、復讐も果たせぬうちにグウィン王は自

身の逃げ込んだ『最初の火の炉』を完全に閉ざしてしまった」

開ける手段はあることはある。

だがそれはキアランですらどうしようもない、4つの強大なソウルを捧げることではないのだ。

『墓王二ト』、『四人の公王』、『白竜シース』、『混沌の苗床』。

この四人のソウルを集めなければならないが、それはグウィン王の手によってすでに死を目前に控えたキアラン達には無理だ。

勿論、アルヴィナやシフにも無理だ。

上で挙げた四人は強大なだけでなく善も悪もなく、ただ王の敵を殺すように仕組まれただけの存在である。

誰も勝てない。

そんな絶望が心をよぎるが、『大狼』シフと『白猫』アルヴィナだけは違った。

たとえ自分たちに勝てずとも、いつの日か4つのソウルを集め、グウィン王を殺してくれる不死の勇者が現れることを期待することにしたのだ。

その後キアランは二人への謝罪の言葉を口に言いながら、アルトリウスの墓にもたれるように死んで逝った。



他の騎士たちも自らの騎士としての誇りである剣をアルトリウスの墓の側に突き立て、死んだ。

残ったのは『大狼』シフと、『白猫』アルヴィナのみ。

二人は待ち続けた。

友の仇を討てる勇者の来訪を。

アルヴィナは自身の考えに共感してくれるシバと名乗る男に森の侵入者の始末を任せ、シフはアルトリウスの墓の側で侵入者にグウィン王を倒す力があるのか試し続けた。

そして……、もう諦めかけていた時に一人の勇者が現れた。

アルヴィナは彼に期待をし、その彼はシフとの戦いに勝利し、そうして得たソウルを用いて今は亡きアルトリウスの剣を蘇らせた。

その彼は4つの強大なソウルを手に『最初の火の炉』へと向かい、グウィン王と対峙する。

最も勇敢な騎士の剣と、その騎士の愛した女の指輪を手に。

## 第16話：墓を守る者たち（後書き）

確か偽ユルト騎士団は50人だったと思うのですが、それって騎士団としては少ないですかね？

たとえ精鋭騎士団だとしても、王様に仕えるにすれば小規模すぎますし、おそらくアルトリウスをグウィンが殺したことで離反した者が大勢いたのでしょう。

『アノール・ロンド』の方が広いからってのもあるでしょうけど、グウィン王を『最初の火の炉』で守る騎士は5人だけですからね。

グウィン王にアルトリウスの剣とスズメバチの指輪を装備して挑み、パリイで倒す。

カッコイイですが、グウィン王は攻撃力高いですし、そんなことするより近接でガチ殴りか遠距離から魔法連発が楽ですね。

## 第17話：白き世界と黄色い翁（前書き）

今回はプリシラとジュレマイアの話ですね。

プリシラの父親はシースに違いない！

だって白いんですもの（断言）！

母親は『半竜』ッて言うならば人間でしょうけど。

……プリシラを最初に見た時「……カビ？」と一瞬思ってしまった私ですが、プリシラは好きなのですよ。

あのふつくらとした頬の感じが地味ながら妙に可愛く思える！

## 第17話：白き世界と黄色い翁

古の竜との戦いを終えたあと、その戦で活躍をした一匹の竜は一人の人間を愛した。

それは種族を越えての愛であり、最も戦功を挙げた竜ですら決して認められるものではなかった。

そんな愛の物語であつた……。

「さあ、その子をこちらへ渡すのだ」

それは小さな村での出来事。

まだ生まれたばかりの赤子を抱え込む女性を村の皆で攻め立てる。

「その子は災いを呼ぶ。

異形の子など決して村に置いておくわけにはいかないのだ」

「……」

だが女性はその手に抱く赤子をさらに力強く抱きしめるだけ。

しかしそんな事を許すくらいなら村人たちもこのような一人の女性を集団で攻め立てるなど、卑劣な真似はしない。

そんなことをしてでも赤子を取り上げるという決意の元に団結しているのだ。

異形は排除するというねじ曲がった団結によって。

「オギヤー！ オギヤー！」

「ああ、返して！ 私の赤ちゃん！！！」

ついには赤子は村人に奪われ、女性はその場で拘束される。

そして赤子はこのままでは殺される運命だろう。

排他的な村において、人以外を認めず、異形を排除するのが当たり前のこと。

しかし、その小さな村で行われる当たり前の出来事に物申すのは何もその赤子の母親だけではなかった。

「ちよいといいかい？」

一人の老人が村人たちに声を掛けた。

「その赤ん坊をどうするんだい？」

老人は黄色い服を身に纏い、頭には同色の黄色い布を何重にも巻きつけている。

明らかに普通ではない出で立ちにたじろぐ村人たちであったが、老人は構わず言葉を続ける。

「その子……竜の血を引いてるのかい？」

「……ああ、そうだ」

赤子を取り上げた男が答える。

赤子の母は猿轡を噛まされているようで、黙って怒りの目を向けてくる。

「なあに、儂はただの旅の呪術師じゃ。

良ければその赤ん坊、儂に育てさせちゃくれねえかい？」

老人の言葉に村人たちは耳を疑う。

災いを招きかねない忌み子を引き取ろうという酔狂な考えについてもだが、老人が自ら「呪術師」と名乗ったことにもあった。

「ははは、呪術師と言っても僕は誰に恥じることもなく己の研究をしているだけじゃ。」

呪術師みんなが人前に出ることや呪術師であることを名乗るのを控えておる訳じゃないわい。

それよりも……その赤ん坊、そのまま殺すくらいなら僕に預けてみんか？

お前さんらも直接手にかけるのは後味が悪かろう」

確かに老人の言葉は何一つとして問題はない。

外見こそ怪しいが態度は紳士的であり、半竜とは言え、子どもを殺すのはやはり気が咎める村人たちは結局渡すことにした。

「おおおお、なかなか可愛い赤子じゃないかい。」

そっちのお母さんや、僕が大切に育てるから今は任せておけ」

そう言つと老人は村を去ろうとする。

誰も引き止めようとしないし、老人も止まるつもりはないだろう。

「おっと、そう言えばまだ名前を名乗っておらんかったのう。

儂の名は『黄の王』ジュレマイア。

この名を知る者は追ってこないでおくれ。

今の儂は何よりも平穩を望んでおるのじゃから」

村人たちはその名に驚く。

否、その名を知らぬ者がこの世界にいるのかすら疑わしい伝説の大罪人である。

かつてラトリアという象牙の塔のごとき美しき国を色恋沙汰に狂って滅ぼした王である。

大昔に世界を繋ぎ止めた勇者に殺されたと聞いていたが、どうやら生きていたのか。

しかし村人たちの驚きとは別に、ジュレマイアはそれだけ言っていると満足したのか立ち去って行く。

赤子の母は子どもを取られたためか生きる氣力を無くしていたが、後日ジュレマイアからおかしな人形と共に送られてきた手紙を読んで再び元氣を取り戻したとそうだ。

ジュレマイアは赤子のために誰にも攻め込まれず、かつ誰もが優しげな閉ざされた世界に逃げ込み、母親が来るのを待っていると書かれていたのだ。



母親はその手紙と同封されていた、隔離された世界への鍵となる人形を手に『アノール・ロンド』の地を目指す。

だが、その途中で不死の呪いにかかってしまい、北の不死院に送り込まれてしまった。

大切な我が子との唯一の絆であるおかしな人形を持ったまま。

「ふむ、それにしてもこの子はまだ名前がないようじゃし儂がつけてやろうかのう。」

……プリティーで知らぬ者無き無双の女の子に育つように、という意味を込めて『プリシラ』と言っのはどうじゃろうか？

「うむ、良い名じゃ」

ちなみにプリシラの名前はこうして決まったそうな。

閉ざされた世界。

完結してしまった永遠の場所。

雪が優しく降り積もり、常に変わることのない永遠の世界、それが『エレーミアスの絵画世界』だ。

そこは一人の老人が隠居の地とするために作りだし、そして一人

の少女を匿うための場所であつた。

「あはははは」

「これこれプリシラ、あんまり遠くに行つてはいけないぞ」

雪原を走りまわる白い少女。それに呆れたような表情を浮かべつつも、どこか嬉しそうにあとを追う黄色い服を纏う老人。

少女の名前は『半竜』プリシラ。

竜の血を引いてしまったがために忌み嫌われ、この世界に逃げ込んだ少女である。

黄色い老人の名は『黄の王』ジュレマイア。

少女プリシラを救うためにこの世界に連れてきた呪術師である。

「それにしてもお前さん、だいぶ大きくなったのにいつまでも子供っぽいままじゃのう」

「お爺ちゃんが甘えさせてくれるからだよー」

わたし、お爺ちゃんが側にいればそれだけで幸せなんだもん」

笑顔のジュレマイア以上に万面の笑みを浮かべてプリシラは言う。

「（ああ、やはりこの世界への共としてこの子を選んで良かったわい）」

変わらぬ景色故、季節感も時間の流れも感じないが、少なくとも5年ほどは経っただろう。

最初は赤子だったプリシラも竜の血のおかげか、同年代の子よりも成長が早い。

いや、顔立ちは幼く、言動も子どもらしいものだ。  
ただ身長伸びがいいだけだろう。

「あと数年もすれば僕の背も超えるんじゃないか。  
そしていつの日か、この世界にやってきて彼女の存在を肯定してくれるような男と結ばれる日が来ればよいのじゃが……」

しかしジュレマイアとプリシラがいる『エレミアスの絵画世界』に訪れる者は今のところ零。

一応やってくる手段はあるが、その手段を持ってここに来れる者なんてそうはいないだろう。

時間の経過によつては、世界がプリシラを受け入れてくれる日も来るかもしれない。

だが人間という生き物は排他的だ。少なくとも竜の存在を受け入

れてくれる者が現れるまではこの世界に留まる必要はあるのだ。  
たとえ何も変わらない世界だとしても。

それに、この子の笑顔が見れるこの世界は幸せなことなのだろう。  
そうして長い年月が過ぎていき、永遠に変わることのない世界で  
数少ない変わる者、人間である『黄の王』ジュレマイアはこの世界  
で死んだ。

それでも孫のように可愛がっていた『半竜』プリシラを守るため  
に闇霊となって尚、留まり続けたのだった。

## 第17話：白き世界と黄色い翁（後書き）

そういえばプリシラって角や翼はないみたいですね。  
もしかして服や髪で隠れているのでしょうか？

そんな感じです。

私の中で「プリ」と名に付く者は「プリニー」というイメージがありました。が、これからは「プリ」という言葉を見たらプリシラを真っ先に思い出すかもしれません。

他にこんな名前はないかもしれませんが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9428x/>

---

読んで楽しむダークソウル

2011年11月20日14時01分発行